世界代表司教会議　第 16 回通常総会

ともに歩む教会のために–交わり、参加、そして宣教

討議要綱–第 1 会期

（2023 年 10 月）

目次

序
これまでの軌跡
シノドスの旅、第 2 フェーズのための作業ツール
本文書の構成について

A. **シノドス的教会のために。不可欠の体験**
A 1. シノドス的教会の特徴的しるし
A 2. シノドス的教会の進むべき道、霊における対話

B. **交わり、宣教、参加。シノドス的教会の三つの優先事項**
B 1. 輝きを放つ交わり。神との一致、そして全人類の一致のしるし、道具となるには、どうすればよいでしょうか。
B 2. 宣教における共同責任。福音への奉仕のため、たまものと働きを、いかにより適切に分かち合えるでしょうか。
B 3. 参加、統治、権威。宣教するシノドス的教会の中には、どのようなプロセス、組織、団体が必要でしょうか。

■シノドス総会のためのワークシート■
はじめに
総会のダイナミズム
ワークシートの使い方

B 1.**用ワークシート。輝きを放つ交わり**
B 1.1 愛の奉仕、正義への専心、共通の家のケアは、シノドス的教会において、どのように交わりをはぐくむでしょうか。
B 1.2 シノドス的教会は、「いつくしみとまことは出会う」（詩編 85・11）という約束を、どのように信憑性のあるものにできるでしょうか。
B 1.3 諸教会間でたまものを与え合うという活力ある関係性は、どのように発展していけるでしょう。
B 1.4 新たなエキュメニカルな取り組みを通して、シノドス的教会はどのようにその使命を果たすことができるでしょうか。
B 1.5 福音に照らし、諸文化の豊かさを認め収集し、諸宗教間の対話を発展させるにはどうすればよいでしょうか。

B 2.用ワークシート。宣教における共同責任

B 2.1 宣教の意味と内容の認識を共有するため、わたしたちはどう、ともに歩めるでしょう。

B 2.2 シノドス的教会がまた、「全員が奉仕職を担う」、宣教する教会となるためには、何が行われるべきでしょうか。

B 2.3 女性の、洗礼による尊厳をより深く理解し、促進することによって、現代の教会はどのようにその使命をよりよく果たすことができるでしょうか。

B 2.4 宣教の観点から、洗礼による奉仕職との関連において、叙階された奉仕職を適切に評価するには、どうすればよいでしょうか。

B 2.5 宣教にかかわるシノドス的な観点から、司教の奉仕職をどう刷新し、推進できるでしょう。

B 3.用ワークシート。参加、統治、権威

B 3.1 宣教するシノドス的教会において、権威による奉仕と責任の行使はどのように刷新できるでしょうか。

B 3.2 どのようにすれば、霊の主役性を尊重しながら、真の意味でシノドス的な方法で、識別の実践と意思決定プロセスを発展させることができるでしょうか。

B 3.3 宣教するシノドス的教会を強化するために、どのような組織を展開できるでしょう。

B 3.4 地方教会のグループ化を伴うシノダリティや団体性の事例に、どういった組織を与えられるでしょうか。

B 3.5 どのようにすれば、シノドスの制度を強化し、それを、全シノドス的教会の中の司教の団体性の表現とできるでしょうか。

本文中に引用されている諸文書

第二バチカン公会議『典礼憲章』（1963 年 12 月 4 日）

第二バチカン公会議『教会憲章』（1964 年 11 月 21 日）

第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』（1964 年 11 月 21 日）

第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』（1965 年 11 月 18 日）

第二バチカン公会議『信徒使徒職に関する教令』（1965 年 11 月 18 日）

第二バチカン公会議『現代世界憲章』（1965 年 12 月 7 日）

第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』（1965 年 12 月 7 日）

聖ヨハネ・パウロ二世教皇使徒的勧告『信徒の召命と使命』（1988 年 12 月 30 日）

聖ヨハネ・パウロ二世教皇回勅『新しい課題』（1991 年 5 月 1 日）

教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』（2013 年 11 月 24 日）

教皇フランシスコ使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』（2018 年 9 月 15 日）

教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている』（2019 年 3 月 25 日）

教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』（2020 年 10 月 3 日付）

教皇庁シノドス事務局『準備文書』（2021 年）

教皇フランシスコ使徒憲章『プレディカテ・エバンジェリウム』（2022 年 3 月 19 日）

教皇庁シノドス事務局『大陸ステージのための作業文書』（2022 年 10 月）

教皇庁シノドス事務局『討議要綱』（2023 年）

討議要綱

序

「忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように」（ローマ 15・5–6）。

これまでの軌跡

1. 2021 年 10 月に教皇フランシスコが全教会をシノドスに招集して以来、神の民は動き始めています。もっとも重要で初歩的なレベルから始まり、世界中の地方教会は、『準備文書』の 2 項で述べられた基本的な質問から、神の民の意見聴取を開始しました。「**今日、さまざまなレベル（地方レベルから全世界レベルまで）で行われているこの『ともに旅をする』ことは、教会がゆだねられた使命に従って福音をのべ伝えることを可能にするでしょうか。また、シノドス的な教会として成長するために、聖霊はどのような段階を踏むようにわたしたちを招いているでしょうか**」。意見聴取の結果は教区レベルで集められ、その後、まとめられて、東方典礼カトリック教会のシノドスと各国司教協議会に送られました。各シノドス・司教協議会は、シノドス事務局に提出されるまとめの文書を作成しました。

2. 現在進行中のシノドスの歩みの新たな段階を担うため、収集された文書の読解と分析から『大陸ステージのための作業文書』が起草されました。この『作業文書』は、世界中の地方教会に戻され、この『作業文書』に参与し、七つの大陸総会で出会い、対話するよう招かれました。この間、デジタルによるシノドス活動も継続されました。その目的は、各大陸の教会の経験ともっとも強く共鳴する洞察と緊張に焦点を当て、各大陸の視点から、シノドス総会の第 1 会期（2023 年 10 月）で取り組むべき優先事項を特定することにありました。

3. **この『討議要綱』は、聞き取りのフェーズで集められたすべての資料、とくに大陸別総会の最終文書に基づいて起草されたものです**。この文書の発行により、シノドスの第 1 フェーズ［訳注：本稿内では、教区〜大陸ステージの期間］である「ともに歩む教会のため―交わり、参加、そして宣教」が終了し、シノドス第 16 回通常総会が開催される二つの会期[1]（2023 年 10 月と 2024 年 10 月）からなる第 2 フェーズ［訳注：同、バチカンでの 2 回の総会］が始まります。その目的は、教会の通常の生活の中でシノドスの歩みを活性化し続け、神の民としてより決定的に歩むよう聖霊がわたしたちを誘う道筋を特定することにあります。次の総会でわたしたちが求める果実は、主から託された使命に忠実な神の民として教会がともに歩むことを聖霊が鼓舞してくださることです。実際、シノドスの目的は、「文書を作成することではなく、教会の宣教の実現に向けて希望の地平を開くことにある」（『大陸ステージのための作業文書』6 項）のです。

[1] 今後、簡潔にするため、またとくに指定がない限り、「総会」および「シノドス総会」という表現は、この『討議要綱』が対象としている、2023 年 10 月の第 1 会期を指す。

4. **これまでの旅、とくに大陸ステージで、世界のさまざまな地域で教会が体験している個別の状況を特定し、共有することが可能となりました。**そうした中には、公正な平和の構築への新たな取り組みを呼びかける、世界を血で染めるあまりにも多くの戦争の現実があり、共通の家のケアという必要な優先事項を暗示する気候変動が示す脅威があり、搾取、不平等、使い捨て文化を生み出す経済システムに反対する叫びがあり、マイノリティを押し殺す文化的植民地主義による均質化圧力に抵抗したいという願いがあります。殉教するほどの迫害や移住によって、地域社会が次第に空洞化し、その生存が脅かされている状況は、深い嘆きを生んでいます。各地方教会は、緊急の社会的現実に対処できるように準備できるかを懸念しています。その現実とは、現在、地球全体に広がっている文化的多元主義から、自分たちの住む国の中に散在するマイノリティを代表するキリスト教共同体の体験に至るまで、さらに、宗教的な経験など無用のことだと考えるような、ますます進んだ、そしてときには攻撃的な世俗化との折り合いをつけるという体験に至るまで、です。しかし、そこにも福音のよい知らせへの渇望が残っています。多くの地域で、教会は、性虐待や、権力、良心、金銭の乱用など、さまざまな形の虐待によって引き起こされる危機に深く影響を受けています。これらは開かれた傷であり、その結果はまだ完全には対応されていません。教会は、被害者や生存者に与えた苦痛に対する悔い改めに加え、将来、同じような状況が再び起こらないようにするために、回心と改革への取り組みをますます強化しなければなりません。

5. 多様でありながら世界的に共通の特徴をもつこのような状況の中で、シノドスの旅は行われます。2023 年 10 月のシノドス総会は、教会が生活し、その使命を遂行する状況に深く耳を傾けるよう求められます。ともに歩むとはどういうことか、この問いが実際の人々や状況を念頭に置きながら特定の文脈で問われるとき、その宣教的緊急性が増すのです。危機に瀕しているのは、現代の男女がどこにいてもともに歩み、特定の苦しみの状況に生きる教会とともに歩むことから生まれるカトリックの本性を実践することによって、福音を告げ知らせる力量です（『教会憲章』23 項参照）。

6. シノドス総会に、わたしたちは聞き取りフェーズで収集された成果をもち寄ります。第一に、わたしたちは、**信仰のうちに兄弟姉妹の間での、誠実で尊敬に満ちた出会い**の中で表される喜びを体験しました。**つまり、互いに出会うことは、わたしたちのただ中におられる主に出会うことです**。このように、わたしたちは、年齢、性別、社会的条件の多様性の中で、カリスマと教会的召命の並外れた豊かさを示し、言語、文化、典礼上の表現、神学伝統の違いの宝庫である教会のカトリック性に自らの手で触れることができたのです。実際、この豊かな多様性は、各地方教会から他のすべての教会への贈り物であり（『教会憲章』13 項参照）、シノドスのダイナミズムは、この豊かな多様性を画一化することなく評価し高める方法です。同様に、わたしたちは、使徒的聖伝の共通の遺産に基づき、世界のさまざまな地域でさまざまな方法でシノダリティが経験され理解されているとしても、共通の問いがあることを発見しました。シノダリティの一つの課題は、それぞれの問題に取り組むのに、どのレベルがもっとも適切かを識別することです。同様に、ある種の緊張を共有することもできます。わたしたちはこのような緊張におびえることなく、またどんな犠牲を払ってでも解決しようとすることなく、むしろ継続的にシノドス的な識別に取り組むべきです。そうすることによってのみ、こうした緊張はエネルギー源となり、破壊的な極論に陥ることはないのです。

7. 第 1 フェーズで、**わたしたちのアイデンティティと召命は、ますますシノドス的な教会になることだという**認識を新たにしました。ともに歩むこと、つまりシノドス的になることは、自分についてこう語った師であり主の弟子、友人になるための真の道です。「わたしは道」（ヨハネ 14・6）なのです。今日、これはまた深いのぞみです。**この旅は終わりの日に成就することを意識しながら**、それをたまものとして経験した**わたしたちは、この旅を続けたいと願っています**。そのとき、神の恵みによって、黙示録に次のように記されている、群衆の一員となるのです。「あらゆる国民、種族、民族、ことばの違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝をもち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである』」（黙示録 7・9–10）。この箇所は、最終的に完成されたシノダリティのイメージをわたしたちに与えてくれます。そこにおいては、完全な交わりが、それを構成するすべての異なるものの上を支配しています。その違いとは、完成するために残っている一つの使命の中で維持され、統合されるものです。つまり、その使命とは、すべての被造物から、キリストを通して、聖霊の一致において、おん父に向かって立ち上がる、賛美の典礼に参加することです。

8. すでに、完全なる聖徒の交わり（『教会憲章』50 項参照）を生きているこれらの姉妹と兄弟の執り成しに、そしてとくにその中で先頭に立つ（同、63 項参照）教会の母マリアに、わたしたちは総会の働きとシノドス的教会へ向かうわたしたちの取り組みの継続をゆだねます。わたしたちは、この総会が、霊が注がれる時であることを願い、さらに、**その成果を世界中のキリスト者共同体の日常生活の中で実行に移す時が来る際に、わたしたちに恵みが与えられますように**と願います。

シノドスの旅、第 2 フェーズのための作業ツール

9. 「2021–2024 年シノドス」の特徴は、必然的にこのシノドス総会の意味と力学に反映され、したがって、その総会のための『討議要綱』の構造にも反映されます。とくに、長い準備段階を経て、すでに多種多様な文書が作成されています。具体的には、『準備文書』、各地方教会からの報告書、『大陸ステージのための作業文書』、各大陸別総会の最終文書などです。このように、地方教会間、および地方教会とシノドス事務局との間で、相互に情報交換するサイクルが確立されてきました。現在の『討議要綱』は、過去の文書を無効にしたり、その豊かさをすべて取り入れるのではなく、それらに根ざして、継続的に参照するものです。総会の準備のために、**シノドスのメンバーは、過去の文書、とくに『大陸ステージのための作業文書』、さまざまな大陸別総会の最終文書、およびデジタル・シノドスの報告書を心に留め、それらを自らの識別のためのツールとして使用するよう求められています**。とりわけ、大陸別総会の最終文書は、異なる文脈と、それぞれが提起する課題の具体性を保持するために、とくに価値があります。シノドス総会での共通作業は、識別のために、これらのリソースを無視することはできません。「2021–2024 年シノドス」のウェブサイト（www.synod.va）の特別ページに集められた多くの資料も役立つでしょうし、とりわけ、使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』と、教皇庁国際神学委員会の二つの文書、『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』（2018 年）と『教会生活における信仰の感覚』（2014 年）　が参考になるでしょう。

10. すでに利用可能な資料が豊富にあることから、『討議要綱』は 2023 年 10 月のシノドス総会の実施とその準備のための実用的な補助としてデザインされています。この『討議要綱』は、『大陸ステージのための作業文書』の記述にあるように、「教会の司教の文書でも、社会学的調査の報告書でもなく、運営上の指示、目標、目的の定式化を提供するものではなく、神学的ビジョンの完成された労作でもありません」（8 項）。これは、『討議要綱』が未完成のプロセスの一部であることを考えれば、必然的なことです。しかしながら『討議要綱』は、『大陸ステージのための作業文書』を超える一歩を踏み出し、第一フェーズの洞察と現在の大陸別総会の活動から引き出し、**神の民の声に耳を傾けることから生まれた優先事項のいくつかを明示しています**。しかし、それを主張や姿勢として提示することは避けています。そうではなく、**シノドス総会に向けた質問として**表現されています。この本文は、シノドス的教会の継続的な成長を可能にする具体的なステップを識別する任務を負い、その歩みを教皇に提出することになるのです。そうして初めて、耳を傾けることの特別なダイナミズムが完成するのです。その中では、「一人ひとりにとって学ぶことがあります。信徒、司教団、ローマの司教、それぞれがお互いに耳を傾け、また皆が『真理の霊』（ヨハネ 14・17）である聖霊に耳を傾けます。それは、聖霊が『諸教会に告げる』（黙示録 2・7）ことを認識するためです」[2]。このように考えると、『討議要綱』の目的は、シノドス総会の最終文書の第一稿となるべきものではなく、単に修正や訂正がなされるものではありません。むしろ、この『討議要綱』は、教会のシノドス的次元に関する最初の理解を概説し、それに基づいて、さらなる識別ができるようになるのです。シノドス総会の参加者は『討議要綱』の主要な受信者でありますが、これはまた、透明性の理由だけからではなく、教会での取り組みを実施することに寄与するものとしても、公開されます。とくにそれは、10 月総会の結果を待つ間、地方や地域レベルでのシノドス的な動きへ参加するよう促しうるものです。これによって、地方教会が祈り、考察し、行動し、自らの貢献を果たすよう求められている、さらなる材料が提供されることになります。

11. 『討議要綱』が投げかける質問は、それが導き出されたプロセスの豊かさの表現です。つまりそれらは、参加した人々の特定の名前と顔の刻印をもち、神の民の信仰体験をあかしし、したがって超越的な体験の現実を明らかにしています。この観点から、それらは、わたしたちが自信をもって旅を続け、教会のシノドス的な実践を深めるよう招かれている地平線を示しています。**第 1 フェーズでわたしたちは、特権的な参照点として、洗礼を受けた人が実践的に「ともに歩む」ことを体験する神学的な場として、地方教会を捉えることの重要性を理解することができます**[3]。しかし、これは後退を意味するものではありません。どの地方教会も、他のすべての教会と結ばれている関係性の外で生きることはできません。その中には、ローマの教会との特別な関係も含まれています。ローマの教会はその司牧者である教皇の奉仕職を通し、一致の奉仕をゆだねられており、その教皇がシノドスに全教会を招集しているのです。

12. このように地方教会に焦点を当てるには、その文化、言語、表現方法が変化に富み、多様であることを考慮する必要があります。とくに、同じことば、たとえば「権威」や「リーダーシップ」につ

[2] 教皇フランシスコ、「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説（2015 年 10 月 17 日）」。『準備文書』15 項参照。

[3] ここでいう「地方教会」という表現は、新教会法典が「部分教会」と呼んでいるものを指している。

いて考えても、言語や文化圏が異なれば、その響きや意味合いは大きく異なることがあり、とりわけ、ある文脈でそのことばが正確な理論や思想的アプローチと関連している場合には、そうなります。『討議要綱』は、異なる地域や伝統から集まった、シノドス総会の参加者間のより良い理解を促進することを願い、分断するようなことばを避けるように努めています。第二バチカン公会議のビジョンは、共通する参照点です。それは、神の民のカトリック性から出発して、「個々の部分は、自分に固有なたまものを他の部分と全教会に提供」するからです。「こうして全体と個々の部分とは、相互に交換し合うことにより、また一致における完成を目指して協力することによって、……ペトロの座の首位権は変わることなく存続します。このペトロの座は愛の全集団を主宰し、合法的な多様性を保護し、また同時に部分的なものが統一を傷つけることなく、むしろそれに役立つように配慮する」（『教会憲章』13 項）のです。このカトリック性は、普遍教会と地方教会の間の相互の内面性の関係において実現され、その中において、またそこから「唯一単一のカトリック教会が存在する」（同、23 項）のです。地方教会で最初に表現されたシノドスの歩みは、今、普遍教会において、シノドス第 16 回通常総会の二つの会期の展開によって、その第 2 フェーズに至っています。

本文書の構成について

13. 本『討議要綱』は、大陸別総会に託された課題（したがって、関連する最終文書の内容）に対応する二つのセクションに分かれています。まず第 1 に、大陸別総会は、各大陸の教会が宣教のためにシノドス的次元を生きる体験から何を学んだかを確認するために、第 1 フェーズでたどった道のりを再読するよう求められました。第 2 に、大陸別総会は、『大陸ステージのための作業文書』を振り返り、その大陸の各地方教会で生じた反響を識別するために、シノドス総会で話し合いを続けるべき優先事項を確認することが求められました。

14. **『討議要綱』のセクション A は**、「シノドス的教会のために」と題され、これまで歩んできた道のりの洞察を集めようとするものです。まず、**シノドス的教会の基本的な特性や特徴的な点について概説しています。そして、シノドス的教会は、特定の運営方法によっても特徴づけられるという認識を明確にしています**。第 1 フェーズの結果によると、霊における対話はこうした運営方法です。今回の総会は、これらの洞察を明確にし、洗練させることを目的として、これらの洞察に応答するよう招かれています。この『討議要綱』のセクション B は、「交わり、宣教、参加」[4]と題され、**三つの質問の形で、すべての大陸での作業からもっとも強く浮かび上がった優先事項を明確にし**、こうして、それらを識別のために総会に提出します。シノドス総会の作業プロセス、とくに分科会（*Circuli Minores*）のプロセスを支援するために、三つの優先事項ごとに五つのワークシートが提案されており、異なる観点からアプローチすることができるようになっています。

15. セクション B の三つの優先事項は、それぞれのワークシートを通して展開されており、非常に関連性の高い幅広いテーマを扱っています。その多くはシノドス全体の主題となりうるものであり、すでにそうなっているものもあります。多くの場合、教導職による関与もまた数多くあり、そして内容が十分に明確なものでした。総会では、これらを広範囲に取り扱うことはできませんし、何よりも、

[4] セクション B で、シノドスの副題について、順番を入れ替えた理由を説明する。下記 44 項参照。

それぞれ別個に検討されるべきでもありません。そうではなく、それらは、今回の作業の真のテーマ、すなわち、シノドス的教会との関係から出発して扱われるべきです。たとえば、家庭と若者に十分な注意を払うことの緊急性についての言及は、家庭や若者の奉仕職について新しい取り扱いを刺激することが目的ではありません。その目的は、過去二回のシノドス通常総会（2015 年と 2018 年）の結論と、それに続くシノドス後の使徒的勧告『愛のよろこび』と『キリストは生きている』が実現されることにより、規則、組織、プロセスにおいて必要な変化を歓迎し、同伴し、受容する教会としてともに歩む好機としてどのように表現されるかに焦点を当てる助けをすることです。同じことが、ディスカッション・スレッドに現れる、他の多くの課題にも当てはまります。

16. 総会とその参加者に求められる責任は、セクション A で概説される働きを特徴づける**概要を維持すること**と、セクション B の焦点となる働きである、具体的かつタイムリーな方法で**講じるべき実践的措置を特定することの間の、動的な均衡を維持する**こととなるでしょう。これによって、聖霊の声を受け入れるために教会全体が開かれていくことを任務とするシノドス総会の識別が、実り多いものになるかどうかが決まります。この働きのためのひらめきは、『現代世界憲章』の明確な表現から得られるかもしれません。 同憲章は、性格と焦点が異なる「2 部から成っているが、一つのもの」（同、注 1）です。

A. シノドス的教会のために

不可欠の体験

「たまものにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人ひとりに『霊』の働きが現れるのは、全体の益となるためです」（一コリント 12・4–7）。

17. 第 1 フェーズの各段階での語りには、ある共通する特徴があります。それは、思っていた以上にシノドスの旅を分かち合うことができた参加者たちが表した驚きの姿です。**シノドスの歩みは、参加する**人々にとって、**主とのきずな、人々の友愛、教会への愛を形づくる、信仰における出会いの機会を提供します**。それは、個人レベルだけでなく、共同体全体を巻き込み、活気づけるものです。その体験とは、教会に希望の地平が開かれる体験であり、歴史を通してみ国に向かう道へと教会を導く、霊の存在と働きの明確なしるしです（『教会憲章』5 項参照）。「**シノドスの主役は聖霊です**」[5]。このように、ともに旅をしようという招きが強く受け入れられれば受け入れられるほど、シノドスは神の民が熱意をもって、しかし甘えることなく進む道となってきました。実際、問題、抵抗、困難、緊張は、自由と誠意をもって話し、耳を傾けることのできる真の対話の文脈のおかげで、隠されることなく、特定され名前が与えられます。しばしば敵対的な仕方で提起される課題や、今日の教会生活において受容と識別の場のない課題については、シノドスの歩みの中で宣教的な仕方で取り組むことができるのです。

18. 「シノダリティ」のような抽象的、理論的な用語は、このように具体的な体験の中で具現化され始めています。神の民の声に耳を傾けることから、「内側からの」シノダリティの斬新的な適用と理解が生まれます。それは、原理、理論、公式を宣言することから派生するものではなく、建設的で、尊敬と祈りに満ちた語り、聞き取り、対話のダイナミズムに入る用意があることから発展するものです。このプロセスの根底にあるのは、たまものであり課題でもあるものを、個人としても共同体としても受け入れることです。それは、キリストにおける姉妹と兄弟の教会として、互いに耳を傾け、そうすることで聖霊によって少しずつ変容していくことなのです。

A 1. シノドス的教会の特徴的しるし

19. このような総合的理解の中で、シノドス的な教会のある種の特徴や独特のしるしについて、一つの気づきが生まれます。これらは、シノドス総会の働きから始まり、わたしたちがそれらを明確にし、洗練させ続ける旅に出る際に、ともに考え、熟考すべき共通の確信です。

[5] 教皇フランシスコ「シノドスの道の始まりを振り返るにあたって」2021 年 10 月 9 日。

20. これは、すべての大陸から力強く浮かび上がってくるものです。つまり、**シノドス的教会は、洗礼に由来する共通の尊厳を認識することに基づいて設立され、その洗礼は、受けるすべての人を皆、神の息子と娘、神の家族の一員とし、したがって、唯一の霊が住まい、共通の使命を果たすために遣わされるキリストにおける兄弟姉妹とする、**という認識です。パウロのことばを借りれば、「わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」（一コリント 12・13）。洗礼は、教会のすべてのメンバーの間に真の共同責任を生み出し、そのことは、教会の宣教と教会共同体の建設の中で、各自のカリスマをもって、すべての人が参加する中で表されるのです。**シノドス的教会は、交わりの地平の中以外では理解できないものであり、それはまた、つねに、**人間存在のあらゆる次元において福音を告げ知らせ、受肉させるという**一つの宣教でもあるのです**。交わりと宣教は、教会をキリストのうちに「しっかり組み合わされ、結び合わされ」（エフェソ 4・16）た一つのからだとし、み国に向かってともに歩むことを可能にするエウカリスチアにともにあずかることによってはぐくまれます。

21. このような意識の根底にあるのは、洗礼に基づく共通の尊厳と宣教のための共同責任が認められるだけでなく、行使され、実践される空間を構成するために、**その団体、組織、プロセスにおいても、ますますシノドス的になる教会**を希求する願いです。この空間では、教会における権威の行使はたまものとして評価され、それが、弟子たちの足を洗うために身をかがめたイエスを模範として（ヨハネ 13・1–11 参照）、「真の奉仕であって、それは聖書の中で、意義深くも『ディアコニア（奉仕）』すなわち役務と呼ばれている」（『教会憲章』24 項）ものとして、ますます形づくられていくことが望まれます。

22. 「**シノドス的な教会とは耳を傾ける教会です**」[6]。この認識は、シノドスの旅の経験が生んだ成果です。それは、みことばに耳を傾け、個人として、また地方レベルから大陸レベル、普遍教会レベルまで教会共同体の間で互いに耳を傾け合うことを通して、霊に耳を傾けることです。多くの人にとって、大きな驚きは、共同体から耳を傾けられるという体験であり、場合によっては、その息子、娘一人ひとりに対するおん父の愛をあかしする、人間としての固有の価値を、初めて認めてもらうという体験でした。このように聴き、聴かれる体験は、実用的な役割だけでなく、イエスは出会った人々にどのように耳を傾けたかという模範に倣うことで、神学的、教会的な深みをもつようになります。このように耳を傾ける姿は、キリスト教共同体がそのメンバーの間だけでなく、他の信仰共同体や社会全体との間に築くすべての関係性、とりわけその声がもっとも無視されがちな人々に向けた関係性を特徴づけ、変革するために必要です。

23. 耳を傾けることに専心する教会として、**シノドス的な教会は謙虚であろうと希望し、ゆるしを請わねばならず、学ぶべきことがたくさんあると理解しています**。いくつかの報告では、シノドスの道は必然的に痛悔の道であり、教会共同体の構成要素であるシノドス的次元をつねに生きてきたわけではないことを認識している、と指摘しています。今日の教会の表情には、疑念や信頼性の欠如という深刻な危機のしるしが見られます。多くの文脈において、性虐待や、権力、金銭、良心の濫用に関連

[6] 「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説」。

する危機によって、教会は厳しい良心の糾明に追い込まれています。それによって、教会は、和解、いやし、正義の道を切り開く悔い改めと回心の旅において、「聖霊の働きのもとにたえず自らを新たにする」（『教会憲章』9 項）のです。

24. **シノドス的教会とは、出会いと対話の教会です**。わたしたちが歩んできた道において、こうしたシノダリティの側面は、一つの洗礼のきずなによって結ばれている他の諸教会や教会共同体との関係において、とくに力強い形で現れます。「教会の一致の源泉」（『エキュメニズムに関する教令』2 項）である聖霊は、これらの諸教会や教会共同体の中で働き、わたしたちを相互理解、分かち合い、共通の生活構築の道へと招いています。地方レベルでは、他の諸教会や教会共同体のメンバーとともにすでに行われていることの重要性が強く浮かび上がっており、とりわけ、迫害されるほど敵対的な社会文化状況―これは殉教のエキュメニズムですが―や、生態系の緊急事態に直面したときの共通の証人として、その重要性が現れます。また、あらゆるところで、第二バチカン公会議の教導権と調和して、エキュメニカルな旅を深めたいという深い望みも表出しています。つまり、真の意味でシノドス的な教会は、一つの洗礼を共有するすべての人々を巻き込まずにはいられないのです。

25. **シノドス的教会は**、他の宗教の信者や、教会を取り囲む文化や社会、そして何よりも教会そのものを貫く数多くの不一致の中で、出会いと対話の文化を実践するよう求められています。この教会は、**それが担う多様性を恐れることなく、画一化を強いることなく、それを大切にします**。シノドスの歩みは、多様性の中の一致を生きることがどういうことかを学び始める機会であり、探求し続けるべき基本点で、前進するにつれて道が明らかになると信じています。したがって、**シノドス的教会は、「わたし」から「わたしたち」への移行を促します**。それは、多様性を尊重しつつも、霊によって一つにされたからだの一部となるように、という声が響く空間です。キリスト・イエスのうちに神が与える救いをすべての民にのべ伝えるという、一つの宣教に奉仕する民として、主に耳を傾け、主に応答するようわたしたちを駆り立てるのは、この霊です。このことは、非常に多様な文脈の中で起こります。つまり、誰も自分の文脈から離れることを求められているのではなく、むしろそれを理解し、より深くその中に入っていくことを求められているのです。第 1 フェーズの経験を経て、この観点に立ち返ると、シノダリティは何よりもまず、具体的な各地の共同体を活気づけるダイナミズムとして現れます。より普遍的なレベルに移ると、このモメンタムは、真のカトリック性が動作する中で、教会のあらゆる側面と現実を包み込むものです。

26. 多様な文脈と文化の中で生きられているシノダリティは、たとえそれがまだ実現する過程にあるとしても、その始まり以来、教会を構成する一つの次元であることが判明しています。実際、それは、すべての人のための回心、変化、祈り、行動への根本的な呼びかけを表現しつつ、かつてないほど完全に実行されるよう迫ってきています。この意味で、**シノドス的教会は、開かれ、すべての人を歓迎し、受け入れるのです**。この霊の動きが、すべての人をそのダイナミズムに引き込むために、超えなければならないと感じない境界線はありません。キリスト教の根本的な本性とは、特定の少数の召命が有する特権なのではなく、神の娘と息子の関係性について、これまでとは違った理解の仕方を生きてあかしする共同体、愛の真理を体現する共同体、たまものと無償性に基づく共同体を築くようにという招きであるわけです。したがって、根本的な招きは、魅力的で具体性のある教会、つまり、

すべての人が受け入れられていると感じられる外向きの教会を、シノドス的方法で建設することなのです。

27. 同時に、聖パウロの招きに従い、**シノドス的教会は、愛と真理の関係性をより深く理解せよという呼びかけに、誠実に、恐れることなく直面します**。「むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます。キリストにより、からだ全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いてからだを成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです」（エフェソ 4・15–16）。すべての人を真に包摂するためには、キリストの神秘のうちに入り込み、キリストが愛と真理の関係をどのように生きたかにしたがって、自分自身が形づくられ、変えられるようになることが必要です。

28. **シノドス的教会の特徴は、緊張に押しつぶされることなくそれを運営する能力です**。交わり、宣教、参加がどのように生きられ理解されているかをより深めるための原動力として、緊張を体験するのです。シノダリティは回心するための特権的な道であり、なぜなら、シノダリティは教会を一致のうちに再構築するからです。つまり、教会の傷をいやし、記憶を和解させ、教会が負っている違いを受け入れ、膿んでいる分裂からあがない、それによって、教会が「キリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具」（『教会憲章』1 項）となるという召命を、より十全に具現化できるようになるのです。真に耳を傾けること、分断や二極化を超えてともに歩み続ける方法を見出す能力は、教会が生き生きといのちを保ち、現代の文化に対して力強いしるしとなるために不可欠です。

29. **ともに歩もうとすることはまた、わたしたちを不完全さという健全な不安に触れさせることになります。**わたしたちには支えきれない、背負いきれないものがまだたくさんある（ヨハネ 16・12 参照）という自覚をもたらします。これは解決すべき問題ではなく、むしろ育てるべきたまものです。わたしたちは、神の無尽蔵で聖なる神秘に直面し、み国に向かって歴史を歩む中で、その驚きに心を開いていなければなりません。このことは、シノドスの歩みが明らかにした問いにも当てはまります。最初のステップとして、すぐに解決策を提示しようと急ぐことなく、耳を傾け、注意を払うことが必要です。

30. このような問いの重みを背負うことは、それに押しつぶされる危険を伴う、特定の役割を担う人の個人的な重荷であってはなりません。それは共同体全体の務めであるべきで、その関係を大切にし、秘跡にあずかる生活がしばしばもっとも効果のある迅速な対応となります。だからこそ、**シノドス的教会は、典礼で祝われる神秘の源泉によって絶え間なく自らを養うのです**。典礼は、とりわけエウカリスチアにおいて、「教会の活動が目指す頂点」、「教会のあらゆる力が流れ出る源泉」（『典礼憲章』10 項）なのです。

31. 神の民が、自分たちは不十分な存在であるという不安からひとたび解放されれば、シノドス的教会にとって必然的な不完全性、そして、そのメンバーが自分自身の弱さを受け入れる覚悟が、霊が働く場となり、その霊が、その存在のしるしをわたしたちが理解するよう招きます。これが、**シノドス的教会がまた識別の教会でもある**理由であり、それは、さまざまな霊的伝統の中でこの語がもつ豊富な意味においてそうなのです。第 1 フェーズでは、神の民は、霊における対話の実践を通して、識別

を経験し始めることができました。互いの生きた経験に耳を傾け合うことで、わたしたちは相互の尊敬を深め、他者の、また自分自身の人生における神の霊の動きを識別するようになります。このようにしてわたしたちは、霊の導きの実りである預言者的決定をくだすことがより可能な教会になっていく責任と希望において、「『霊』が諸教会に告げること」（黙示録 2・7）にさらに注意を払うようになるのです。

A 2. シノドス的教会の進むべき道、霊における対話

32. シノドスの第 1 フェーズの歩みを通じて、すべての大陸の中で、ここで「霊における対話」あるいは「シノドス的方法」と呼ばれる、実り豊かな方法が認識されてきました（18 ページの図参照）。

33. 語源的な意味において、「対話」という用語は、一般的な意見の交換を示すものではなく、話し、聞くことばが親しみを生み、参加者が互いに近づくことを可能にするダイナミズムを示すものです。「霊における」と特定することによって、真の主役がだれであるかが確認されます。つまり、対話する人々の願いは、主の声に耳を傾けることであり、祈りの中で、風のように自分で望む方へ吹く方の自由な行動へと自らを開くのです（ヨハネ 3・8 参照）。信仰の兄弟姉妹の間で交わされる対話は、徐々に「ともに聞くこと」のため、つまり、霊の声にともに耳を傾けるための空間を開いていくのです。具体的な行動を指し示す、正確で、しばしば予期せぬ方向へ向かう一歩がなければ、それは霊における対話ではありません。

34. 地方教会においては、**霊における対話は、生活体験の分かち合いやシノドス的教会での識別のための空間を可能にする空気を提供するものとして受け入れられ、ときには「発見」されてきました。**各大陸別総会の最終文書では、それは聖霊降臨の瞬間であり、教会であることを体験し、キリストにおける兄弟姉妹に耳を傾けることから、真の主役である霊に耳を傾け、霊によって宣教に遣わされる機会であると述べられています。同時に、この仕方を通して、みことばとエウカリスチアの恵みは、感じられ、実現され、変容する現実となり、それによって、主イエスが自らを教会の中に現存させ行動する率先的な行動は裏付けられ、実現されるのです。キリストはわたしたちを宣教に派遣し、聖霊のうちに父なる神へ感謝と栄光をささげるために、わたしたちをご自分の周りに集めます。それゆえ、すべての大陸から、このやり方がますます各教会の日常生活に活力を与え、知恵を与えるようになってほしいという要望が寄せられるのです。

35. 霊における対話は、教会の識別の長い伝統の一部であり、複数の方法とアプローチが生み出されてきました。その、まさに宣教的な価値は強調されるべきです。この霊的実践は、わたしたちが「わたし」から「わたしたち」へと移行することを可能にします。「わたし」の個人的な次元を見失ったり消したりするのではなく、それを認識したまま、共同体の次元へと差し込むのです。このように、参加者たちが語り、耳を傾けることを可能にすることは、典礼と祈りの一つの表現となり、その中で主はご自身を現存させ、わたしたちをかつてないほどの真の交わりと識別の形へ導くのです。

36. 新約聖書には、このような対話様式の模範が数多くあります。**典型的なものは、エマオへの道で復活した主と 2 人の弟子が出会う物語です**（ルカ 24・13–35 参照。『キリストは生きている』237 項に解説）。彼らの体験が示すように、霊における対話は交わりを築き、宣教のダイナミズムをもたらすの

です。実際、2 人は、主があげられたという復活の告知を分かち合うために、自分たちが去った共同体に戻ってきたのです。

37. その具体的な現実として、**霊における対話は、共同識別を視野に入れた、共有された祈りだといえるもので**、そのために参加者は、個人的な内省と黙想によって自らを準備します。参加者は、その場で即興的に意見を述べるのではなく、祈りによって養われた観想を通したことばを互いに贈り合うのです。**参加者の間のダイナミズムは、三つの基本的なステップで表現されます。第 1 に、各自が発言することに専念し**、それは準備の時間に祈りの中で振り返った自分の体験から始めます。他の参加者は、一人ひとりが貴重な貢献をしているという意識をもって、議論や討論をせずに耳を傾けます。

38. 沈黙と祈りは、次のステップの準備に役立つものです。ここでは、各自が自分の中に、他者と神のためにスペースを開くよう招かれます。再度、各自が発言の場に立ちますが、聞いたことに反応したり反論したり、自分の立場を再確認するためではなく、耳を傾けたことからもっとも深く感動したこと、もっとも大きな課題を感じたことを表現するためです。**姉妹や兄弟に耳を傾けることから生まれる内なる足跡は、聖霊がそれとともに自らの声を響かせる言語なのです**。参加者がみことばと秘跡の観想によって養われ、主への親しみを深めれば深めるほど、教導職と神学に伴われることよっても助けられ、主の声の響きをより認識できるようになります（ヨハネ 10・14、27 参照）。同様に、参加者が霊の声に意識的に、注意深く耳を傾ければ傾けるほど、宣教の共通意識をますます成長させることができるのです。

39. 第 3 ステップは、再び祈りの雰囲気の中で、聖霊の導きのもとに、**浮かび上がった重要なポイントを特定し、共同作業の成果に関する合意を形づくることです**。各自が感じている合意はこのプロセスに忠実なものであり、したがって、その合意によって参加者の意見は反映されていると感じることができるものとなります。もっとも多く言及された要点を列挙した報告書を作成するだけでは十分ではありません。むしろ、周縁部にある声や預言者的な声にも注意を払い、意見の相違が生じた点の重要性を見落とさないようにする識別が必要となります。主は「建てること」を可能にする親石であり、調和の師である霊は、耳障りな音から交響曲へ移行する手助けとなるでしょう。

40. この旅は、神への賛美と体験への感謝の祈りへとつながります。「他者のそばに行ってその人にとってのよきものを探し求めるという神秘を生きるときに、わたしたちの心は、主からのとても美しいたまものを受け取るために開かれているのです。**愛をもって人と出会うたびに、神について新しい何かを発見します**。他者を知ろうと目を開くたびに、わたしたちの信仰は神を知ろうとしてよりいっそう輝くのです」（『福音の喜び』272 項）。これは一言で言えば、霊における対話に、あえて加わる人が受け取るたまものです。

41. 具体的な場面では、このパターンに忠実に従うことは決してできません。むしろ、つねに適応させなければならなりません。各自が発言して他の人の話に耳を傾けることを優先することが必要なときもあり、また別の状況では、「わたしたちの心は燃えて」（ルカ 24・32 参照）いるようにするものを求めて、異なる視点間の結びつきを引き出すことが必要なときもあり、さらに別の場合は、合意事項を説明し、霊によって動くように呼ばれていると感じる方向を特定するために協力して働くことが必

要なときもあります。しかし、適切な具体的適応を超えて、三つのステップをまとめる意図とダイナミズムは、シノドス的教会の進め方の特徴であり、今後も変わりません。

42. 霊における対話は、シノドス的教会の生活体験を活性化するために重要であることを念頭に置き、**この方法における養成、とりわけ、それを実践する共同体に同伴できるファシリテーターの養成は、教会生活のすべてのレベルにおいて、優先事項として受け止められるものです**。つまりそれは、共同責任の精神と、さまざまな教会の召命に対して開かれた心をもつ、叙階された奉仕者から始まる、洗礼を受けたすべての人のためのものです。霊における対話のための養成は、シノドス的な教会となるための養成です。

霊における対話

シノドス的教会における識別のダイナミズム

個人の準備

おん父に自らをゆだねることによって、主イエスとともに祈る中で回心し、聖霊に耳を傾け、各自、自らが識別するよう呼ばれている問いに対して自分の答えを準備する。

沈黙、祈り、
みことばに耳を傾け

「発言し、耳を傾け」

各自、順番に、自分の体験と祈りについて語り、他者の発言に注意深く耳を傾ける。

沈黙と
祈り

「他者と神のために スペースを開いて」

他者が語ったことから、各自、もっとも響いたこと、また自分の中でもっとも抵抗を感じたことを分かち合い、その際、聖霊の促しに自らをゆだねる。「聞いていて、いつわたしの心は燃えていたか」

沈黙と
祈り

「ともに形づくって」

わたしたちはともに、霊における対話の成果を識別し、まとめるために、先に現れたことを基礎として対話する。つまり、直感と意見の一致を評価し、不協和音・障害・新たな問いを特定し、預言者的声が現れてくるのに任せる。重要なことは、その作業の成果物によって自分の声が反映されている、とあらゆる人が感じられること。「聖霊は、わたしたちをともに、どの段階へと招いているか」

感謝のための 終わりの祈り

B. 交わり、宣教、参加

シノドス的教会の三つの優先事項

「わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」（ローマ 12・4–5）。

43. 第 1 フェーズの成果、とくに今説明した進め方のおかげで前面に出てきた大陸別総会の成果の中で、三つの優先事項が特定され、現在、識別のために、2023 年 10 月のシノドス総会に提案されています。これらは、全教会が一歩前進し、あらゆるレベルと複数の視点からシノドス的な存在として成長するために、自らを評価しなければならない課題です。それらは、神学や教会法の観点からも、司牧や霊性の観点からも取り組む必要があります。それらは、教区計画のあり方や、神の民の各メンバーの日々の選択とライフスタイルに疑問を投げかけるものであります。また、これらの課題に取り組むには、神の民として、そのすべてのメンバーとともに歩む必要があるため、真の意味でシノドス的なものです。三つの優先事項は、シノドスの三つのキーワードである「交わり」「宣教」「参加」との関連で説明されていきます。これは、シンプルで分かりやすく提示するためなのですが、三つのキーワードを互いに独立した三つの「柱」として提示するリスクがあります。そうではなく、シノドス的教会の生活において、交わり、宣教、参加は相互に統合され、はぐくみ合い、支え合っています。これらは、つねにこのように統合していることを念頭に置いて理解されなければなりません。

44. 宣教が真ん中の位置を占めるように、三つの用語が登場する順序が異なるのはまた、第 1 フェーズで発展した、その結びつきに関する気づきに基づいています。とりわけ、聖ヨハネ・パウロ二世教皇がすでに教えているように、**交わりと宣教は織りなし合い、互いを映し出すもの**です。「交わりと宣教は相互に深く結びついています。相互に深くからみ合い、相伴うものなので、交わりは宣教の源であると同時に実りをも表しています。つまり、交わりは宣教を引き起こし、宣教は交わりの中で完成されるのです」（『信徒の召命と使命』32 項。『プレディカテ・エバンジェリム』I、4 にも引用）。わたしたちは、教会共同体の内部の関係が交わりの場であって、宣教は「外部への」動きに関するもの、という二元論的理解を超克するよう招かれています。第 1 フェーズでは、その代わりに、宣教の信頼性の条件が、いかに交わりとなるかに焦点を当てました。この洞察は、「若者、信仰、そして召命の識別」に関するシノドス第 15 回通常総会[7]を想起させるものでした。同時に、宣教への志向は、キリスト教共同体の内部組織、役割と任務の分配、およびその機関や組織の運営のために、唯一、福音に根ざす基準であるという認識が広まっています。**参加は、交わりと宣教との関係性において理解されうるものであり、そのため、他の二つのあとでしか取り組むことができません**。一方で、参加は他の二つに具体的表現を与え、つまり、プロセス、規則、組織、団体に注意を払うことで、宣教は長期的に

[7] たとえば、その『最終文書』は 128 項で、「もしその中で真正な関係性が育っていなければ、組織をもつだけでは不十分」である、と述べている。

強化され、交わりは単なる感情的な自然発生的なものから解放されます。他方、参加は意味、方向性、原動力を得ることで、一致ではなく分断を必ず引き起こす、熱狂的な個人の権利主張へと変質する危険性を回避することができるのです。

45. 総会での作業の準備と構成に付随させるために、各優先事項に対応する五つのワークシートが作成され、このセクションの最後に掲載されています。これらの各項目は、問題になっているその優先事項への入口となります。それはこのように、大陸別総会の活動を通して明らかになった教会生活のさまざまな面に関連する、異なっているが補完的な観点からアプローチできるものです。この場合、付録のワークシートの三つのグループに対応する、次の三つのステップは、並行する情報提供のないコラムとして読まれるべきではありません。むしろ、それらは、教会のシノドス的な生活という同じ現実を、異なる視点から照らし出し、絶えずからみ合い、互いを呼び覚まし、わたしたちを成長へと誘う光の束なのです。

B 1. 輝きを放つ交わり。神との一致、そして全人類の一致のしるし、道具となるには、どうすればよいでしょうか。

46. 交わりとは、社会学的に同一性のあるグループのメンバーとして集まることではなく、何よりも三位一体の神のたまものであり、同時に、神の民としての「わたしたち」を築くという、決して終わることのない働きです。大陸別総会が体験したように、交わりは、『教会憲章』が「神との一致」と呼ぶ垂直的な次元と、「全人類の一致」という水平的な次元を、強力な終末論的ダイナミズムの中で織り交ぜています。交わりとは、わたしたちが成長するよう求められている旅であり、「ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです」（エフェソ 4・13）。

47. わたしたちは典礼の中で、その瞬間の予感を受け取ります。典礼は、地上を旅する教会が交わりを経験し、養い、築き上げる場です。典礼が実際、「キリストの神秘と真の教会のまことの本性を信者が生き方をもって表し、他の人々に明らかにするためにきわめて有益である」（『典礼憲章』2 項）ならば、教会のシノドス的生活を理解するために、わたしたちは典礼に目を向けなければなりません。まず第一に、**教会が根本的な一致を経験するのは、共有された典礼活動、とりわけミサを通してであり、同じ祈りで表現されながら、**言語や儀式の多様性、つまりシノドス的なカギとなる一つの基本的要素が存在します。この観点から、唯一のカトリック教会における儀式の多様性は、各大陸別総会の典礼でも経験したように、保護され促進されるべき真の祝福です。

48. シノドスの集いは、多数派形成の力学を有する、議会的な組織に類似した、代議員的で、立法府的なものとして理解することはできません。むしろ、典礼の集いとの類似によって理解することが求められます。古代の聖伝によれば、シノドスが開催されるとき、聖霊の呼びかけで始まり、信仰告白が続き、教会的交わりを確立、または再設立するための共通の決定に到達するのです。シノドスの集いでは、キリストが現われて行動を起こし、歴史と日々の出来事を変容させ、霊を与え、教会がみ国に向かってともに歩む仕方についての合意を見出すよう導き、全人類がより大きな一致へと向かうの

を助けます。みことばと兄弟姉妹に耳を傾け、つまり、神のみ旨と互いの合意を求めながらともに歩むことは、唯一の霊におけるおん子を通しておん父への感謝につながります。シノドスの集いでは、キリストの名によって集まる人々は、キリストのことばに耳を傾け、互いに耳を傾け、霊に対して従順に識別し、聞いたことを告げ知らせ、それを教会の道の光として理解します。

49. こうした観点から、シノドス的な生活とは、教会を組織するための戦略ではなく、多様性を消すことなく内包する一致を見出しうる体験であり、というのも、それは同じ信仰告白における神との一致に基礎を置くからです。このダイナミズムは、絶えず交わりの範囲を広げようとする推進力をもっていますが、歴史の矛盾、限界、傷と折り合いをつけなければなりません。

50. シノドスの歩みから生まれた第一の優先事項は、まさにこの点に根ざしています。わたしたちの歴史的現実の具体性において、交わりを維持し促進するには、多様性における一致を生きることを可能にする不完全性を引き受ける必要があります（一コリント 12 章参照）。歴史は分裂を生み、それはいやすべき傷を引き起こし、和解のための道筋を作ることが必要になります。このような状況の中で、**福音の名のもとに、溝や柵を乗り超えるためにどういった絆を強める必要があり、どういった隠れ場や保護を築く必要があり、誰を保護するのでしょうか。どの分裂が非生産的なのでしょうか。完全な交わりへと向かう歩みが、徐々に進む中で成し遂げられるのはいつになるのでしょうか**。これらは理論的な問いのように思えますが、第 1 フェーズで意見聴取されたキリスト者共同体の具体的な日常生活に根ざしたものです。実際、これらは、人々やグループを歓迎するわたしたちの意欲に限界があるかどうか、わたしたちのアイデンティティと妥協することなく他文化や諸宗教と対話するにはどうすればいいかといった問いや、周縁部にいる人々の声となり、誰も取り残すべきではないことを再確認するわたしたちの決意にかかわるものです。この優先事項に言及した五つのワークシートは、それを補完する五つの観点からこれらの問いを探求しようとするものです。

B 2. 宣教における共同責任。福音への奉仕のため、たまものと働きを、いかにより適切に分かち合えるでしょうか。

51. 「旅する教会は……その本性上、宣教的」（『教会の宣教活動に関する教令』2 項）です。宣教は、わたしたちがシノドス的教会について考えなければならない動的な地平を形づくり、それは、「いのちをなげうつまでに、他者の幸せのために自己から脱する」（『キリストは生きている』163 項。『兄弟の皆さん』88 項参照）ことの中に生まれる「恍惚」へと向かう推進力を教会に与えます。宣教は、聖霊降臨の体験を人に与えます。つまり、聖霊を受けたペトロと 11 人は立ち上がり、エルサレムに住むすべての人々に、十字架につけられ復活したイエスを告げ知らせるために発言するのです（使徒言行録 2・14–36 参照）。シノドス的生活も同じ原動力に根ざしています。第 1 フェーズの生きた体験をこうしたことばで表現した証言は数多くあり、さらに、シノダリティと宣教を不可分に結びつける証言はさらに多くあります。

52. 神との一致と全人類の一致のしるしと道具として自らを定義する教会（『教会憲章』1 項参照）の中で、宣教に関する言説は、しるしの明瞭さと道具の効力に焦点を当てます。この二つなしでは、ど

んな福音の告知も信頼性がないのです。宣教とは、宗教的な商品を売り込むことではなく、人間関係が神の愛の現れであり、それゆえにその生活そのものが宣教となるような共同体を築くことなのです。「使徒言行録」では、ペトロの講話のすぐあとに、初代教会の共同体の生活が語られていますが、そこではあらゆることが交わりの機会となり（2・42–47 参照）、それが共同体を魅力あるものにしていました。

53. この線で、**宣教に関する最初の問いは、削ることのできない各人の独自性から出発して、キリスト教共同体のメンバーは何を共通に保持することを本当に望んでいるのかを問います**。その独自性とは、洗礼におけるキリストとの直接的な関係性によるもので、霊の住まいとしてのものです。このことは、洗礼を受けた一人ひとりの貢献を貴重で不可欠なものにしています。第 1 フェーズで指摘された、驚きの感覚の理由の一つは、「わたしは本当に何かを提供できるのか」という、こうした貢献の可能性と関連しています。同時に、各自が自分の不完全さを認め、それゆえ、宣教の完全性において誰もが必要とされていることを理解するよう招かれています。この意味で、宣教もまた、構造的にシノドス的側面をもっています。

54. こうした理由から、自らを宣教的でシノドス的な存在と見なす教会が特定する第 2 の優先事項は、カリスマの多様性を評価し、位階的なたまものとカリスマ的なたまものとの関係を統合しながら、各自のたまものと役割をもってすべての人の貢献を求めることができる方法に関するものです[8]。宣教の観点は、カリスマと奉仕職を共通するものの地平の中に置き、このようになれば、その実り豊かさは保護され、カリスマと奉仕職が排除の形態を正当化する特権となるときには、その豊かさは損なわれます。**宣教するシノドス的教会は、洗礼を受けた各人が宣教のために提供できる貢献をどう認識し、評価できるかを自らに問いかける義務があります。**そうした貢献のために、各自は自分の殻から出て、より大きなものに他者とともに参加するのです。「人類の共通善に積極的に貢献する」（『新しい課題』34 項）ことは、キリスト者の共同体の中でさえ、人間の尊厳にとって不可分の要素です。誰もができる最初の貢献は、時のしるしを見分けることで（『現代世界憲章』4 項参照）、それによって霊の息吹と調和して、共通の使命に気づいていられるようにするのです。すべての視点は、この識別に貢献するなにかをもっており、まずそれは貧しい人、排除された人の視点から始まります。つまり、彼らとともに歩むことは、彼らのニーズや苦しみに応え、引き受けることだけを意味するのではなく、彼らの主役性を尊重し、彼らから学ぶことをも意味します。これこそ、彼らの等しい尊厳を認識し、温情主義（welfarism）の罠から逃れ、わたしたちが向かっている新しい天と新しい地の論理を可能な限り先取りする方法なのです。

55. この優先事項に関連するワークシートは、多様な召命、カリスマ、奉仕職の認識、女性の洗礼による尊厳の促進、宣教するシノドス的教会における叙階された奉仕職の役割、とくに司教の奉仕職といったテーマに関して、この基本問題を具体化しようとするものです。

B 3. 参加、統治、権威。宣教するシノドス的教会の中には、どのようなプロセス、組織、団体が必要でしょうか。

[8] 教理省書簡『イウベネシット・エクレジア』（2016 年 5 月 15 日）13–18 項参照。

56.「一人ひとり、すべての人の側からの真の参加を促しながら、わたしたちの旅と活動のあらゆる段階で、シノダリティが具体化された姿を表現する教会実践を育てない限り、『交わり』と『宣教』ということばは、何か抽象的なままになってしまう恐れがあります」[9]。この教皇のことばは、参加を他の二つのテーマとの関連において位置づける助けとなります。参加は、手続き上の次元の具体的な特徴に人間学的な濃密さを加えるものです。参加は、人間が花開くこと、すなわち、交わりの計画と宣教への取り組みの中心にある関係性を人間にふさわしいものとすることへの関心を表明するものです。各人の表情のユニークさを守り、「わたしたち」への移行が「わたし」を不明瞭な集団の匿名性の中に埋没させないよう促します。諸権利を抽象化することに陥ったり、人を組織のパフォーマンスのための従属的な道具におとしめてしまったりしないよう守ります。参加は、本性的に創造力の表現であり、宣教と交わりの中心にある、もてなし、歓迎、人間の幸福という関係性をはぐくむ方法です。

57. このように述べられた総合的参加のビジョンから、大陸ステージの会議でも取り上げられた第 3 の優先事項、すなわち、**シノドス的教会における権威、その意味、その行使の仕方についての問いが浮かび上がります。とりわけ、権威は、世から提供されたモデルに由来する権力の形態として生まれているのでしょうか、それとも奉仕に根ざしたものなのでしょうか**。「あなたがたの間では、そうであってはならない」（マタイ 20・26、マルコ 10・43 参照）と主は言われ、弟子たちの足を洗った後、彼らを戒められました。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」（ヨハネ 13・15）。「権威」ということばは、その起源において、他者が成長できるようにする能力を表しています。したがって、権威とは、各人のユニークさへの奉仕であり、創造性を阻害する支配形態ではなく、創造性を支援するもの、個人の自由の創造への奉仕であって、それを押さえつける縛りではありません。この問いに関連して、具体性と時間の経過に伴う継続性への懸念という第 2 の問いがあります。つまり、**わたしたちの組織や団体に、宣教するシノドス的教会のダイナミズムを吹き込むには、どのようなことができるでしょうか。**

58. この焦点から、参加のダイナミズムを長期にわたって持続させることをまさに目的とした、同様に具体的な、さらなるテーマが導き出されます。養成のテーマは、第 1 フェーズのすべての文書に現れています。大陸別総会の報告書や、それ以前の各地方教会の報告書で繰り返し強調されているように、**教会をシノドス的なものとするためには、団体や組織だけでは十分ではありません。回心する願いに動かされ、適切な養成によって支えられる、シノドス的な文化と霊性が必要です**。養成の必要性は、その内容を更新することにとどまらず、宣教への志向、人間関係や共同体構築の能力、霊的に耳を傾ける意欲、個人の識別と共同識別に精通していることなどを含む、その人のすべての能力と気質に影響を与える、総合的な領域に及ぶものです。また、忍耐、我慢強さ、自信、真実を語る自由（parrhesia）も必要です。

59. 養成は、教会の生活と活動のための司牧モデルを進めるシノドス的な方法を作り上げるための不可欠な手段です。**わたしたちは、神の民全員のために必須の、初期養成と継続養成を必要としています**。洗礼を受けた人は、この取り組みに無関係であると思ってはならず、したがって、すべての信者

[9] 「シノドスの道の始まりを振り返るにあたって」。

に向けられたシノドス的な方法で、養成のための適切な提案を構築することが必要です。その際、とくに、ある人が教会に奉仕するように招かれれば招かれるほど、その人は養成の緊急性を感じなければなりません。つまり、司教、司祭、助祭、男女の奉献生活者、そして奉仕職を実行するすべての人は、シノドス的なカギの中で、権威を行使する方法と意思決定プロセスを刷新するための養成が必要で、そうすることで、霊において共同識別と対話に同伴する仕方を学ぶのです。叙階される奉仕職に就く候補者は、シノドス的な様式とメンタリティのうちに養成されなければなりません。シノドス的な文化を促進することは、現在の神学校のカリキュラムの刷新と、神学の教師や教授の養成を意味し、そうすることで、交わり、宣教、参加の生活のための養成に向けた、より明確で決定的な方向性が現れるのです。より純粋にシノドス的な霊性のための養成は、教会刷新の中心にあります。

60. 数多くの意見の中で、教会が典礼、説教、信仰教育、宗教芸術、さらに、新しいあるいは伝統的なメディアを含む、信者とより広い大衆に向けたあらゆる形態の情報伝達において、**教会が使用する用語を刷新するために、**同様の努力の必要性が強調されています。用語の刷新は、教会が告げ知らせる神秘の深淵さ、あるいはその聖伝の豊かさを卑下したり、おとしめることなく、これらの豊かさが現代人を遠ざける障害となるのではなく、むしろ、理解可能で魅力的なものとすることを目指さなければなりません。福音のことばの新鮮さから受けるインスピレーション、教会の歴史が示すインカルチュレーションの能力、そして、デジタル環境の中でさえもすでに進行中の有望な体験は、宣教するシノドス的教会が希求するゴールである、福音の効果的な告知にとって極めて重要な働きの中で、自信と決意をもって進めるよう、わたしたちを招いています。

ローマ、2023 年 5 月 29 日

教会の母聖マリアの記念日

世界代表司教会議第 16 回通常総会

ともに歩む教会のために―交わり、参加、そして宣教

シノドス総会のためのワークシート

（第 1 会期–2023 年 10 月）

ワークシート
シノドス総会に向けて

はじめに

『討議要綱』 全体が「2023 年 10 月のシノドス総会の実施とその準備のための実用的な補助としてデザインされて」（10 項）いるとすれば、ここで紹介するワークシートは、とくにそうです。ワークシートは、「すべての大陸での作業からもっとも強く浮かび上がった優先事項」（14 項）三つについての識別を容易にし、シノドス的教会として成長するために、聖霊に招かれていると感じる具体的なステップを特定する視点をもっています。したがって、ワークシートの提示、その構造の説明、およびその使用方法の説明は、総会のより広い作業の中の文脈に当てはめていく必要があります。

総会のダイナミズム

使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』14 項に規定されているとおり、総会は、全体会議（*Congregationes Generales*）と分科会（*Circuli Minores*）を交互に行い、『討議要綱』が提起した問いを取り扱う予定です。

とくに、総会は、『討議要綱』が提案する順番で、さまざまなトピックを扱いながら進行します。まず、セクション A「シノドス的教会のために　不可欠の体験」（17–42 項）に取り組み始めます。シノドス的教会の基本的な特徴により明確に焦点を当てることを目的としながら、この 2 年間、神の民によって生きられ、第 1 フェーズの間に作成された文書の中にまとめられた、ともに歩む体験から始まり、司教たちによる識別に至ります。総会は、神の民全体の体験をそのあらゆる複雑さの中で考慮しながら、総合的なやり方で作業を進めることが求められます。

その後、総会は、『討議要綱』のセクション B（43–60 項）に示された、意見聴取のフェーズから浮かび上がった三つの優先事項に取り組むことになります。これらの各優先事項が、「シノドスの三つのキーワードである『交わり』『宣教』『参加』との関連で」（43 項）セクション B が分けられている、三つのパートの中の一つのテーマとなっています。この三つの用語が登場する順番は、44 項で説明されているように、逆になっていて、この順序はワークシートでも維持されています。ワークシートもまた三つのパートに分けられ、それぞれが、セクション B が対応するパートのタイトルを取り、こうして、統一されたテーマが強調されます。

- 「B 1. 輝きを放つ交わり。神との一致、そして全人類の一致のしるし、道具となるには、どうすればよいでしょうか」（46–50 項）。
- 「B 2. 宣教における共同責任。福音への奉仕のため、たまものと働きを、いかにより適切に分かち合えるでしょうか」（51–55 項）。
- 「B 3. 参加、統治、権威。宣教するシノドス的教会の中には、どのようなプロセス、組織、団体が必要でしょうか」（56–60 項）。

五つのワークシートは、三つの優先事項のそれぞれに対応しており、それぞれが「大陸別総会の活動を通して明らかになった教会生活のさまざまな面に関連する、異なっているが補完的な観点からアプローチできる」「問題になっているその優先事項への入口」（45 項）を構成しています。

作業は連続したステップで構成されていますが、二つのセクションを結びつけるダイナミズムが減じるわけではありません。セクション A の総合的な視点をもって取り扱われる神の民の体験は、セクション B で提起されるさまざまな問いを、その体験に根ざしたものとして位置づけるための地平を示し続けます。総会は、「概要を維持することと、……講じるべき実践的措置を特定することの間の、動的な均衡を維持する」（16 項）ことが求められます。後者は前者に深みを与え、具体化するものであり、逆に前者は、詳細部分がばらばらになってしまうリスクに対して見通しと求心力を与えます。

最後に、総会の作業の最後部分は、歩みの成果を収集すること、つまり、わたしたちがこれからともに歩み続ける道を識別することに当てられます。本総会は、2024 年 10 月のシノドス総会第 2 会期の準備のために必要となる、詳細な神学的・教会法的研究を推進することを含め、神の民の体験を引き続き読み解く方法を検討します。

総会は、シノドス全体の歩みを特徴づけてきた霊における対話（32–42 項参照）の方法を、必要に応じて適応させながら、引き続き使用します。こうした方法（以下のページの図参照）を直接に体験することによって、総会は、神のみ旨を識別するための共有された仕方として、教会の日常生活に霊における対話をより簡単に取り入れる仕方について、最大限の洞察力をもって検討できるようになるでしょう。

ワークシートの使い方

ワークシートは、2023 年 10 月の総会において、セクション B で示された三つの優先事項に取り組むための作業ツールとしてデザインされています。したがって、ワークシートは、連続して読む 1 冊の本の各章でもなければ、あるトピックに関する短くおおむねまとまったエッセイでもありません。分科会や全体会議の準備として、祈りと個人の考察のための概要を提供するという意味で、「読まれるべき」ものではなく「行われるべき」ものです。同様に、教会生活のあらゆるレベルにおいて、シノドス的な形式でテーマを掘り下げた会合に使用することができます。それぞれは、対応する『討議要綱』のセクション B の部分と併せて実施されるべきですが、他のすべての部分からは独立して取り扱うことができます。

ワークシートはすべて同じ構成になっています。タイトルにある問いの簡単な背景説明から始まり、それぞれ第 1 フェーズで明らかになったことに基づいて組み立てられています。次に、識別のための問いを提示します。最後に、さまざまな視点（神学的、司牧的、教会法的など）、次元やレベル（小教区、教区など）を概説し、いくつかの見識を提供します。とりわけ、神の民のメンバーの表情がもつ特殊性、彼らのカリスマと奉仕職、そして聞き取りの段階で彼らが表明した問いを思い起こさせます。各ワークシートが与える豊富な刺激は、意見聴取から集められた資料の豊かさと多様性に忠実であろうとした結果であり、すべての問いに対する回答を要求するアンケートとして考慮されるものではありません。ある見識は世界の特定の地域で、また別の見識は別の地域でとくに刺激を与える

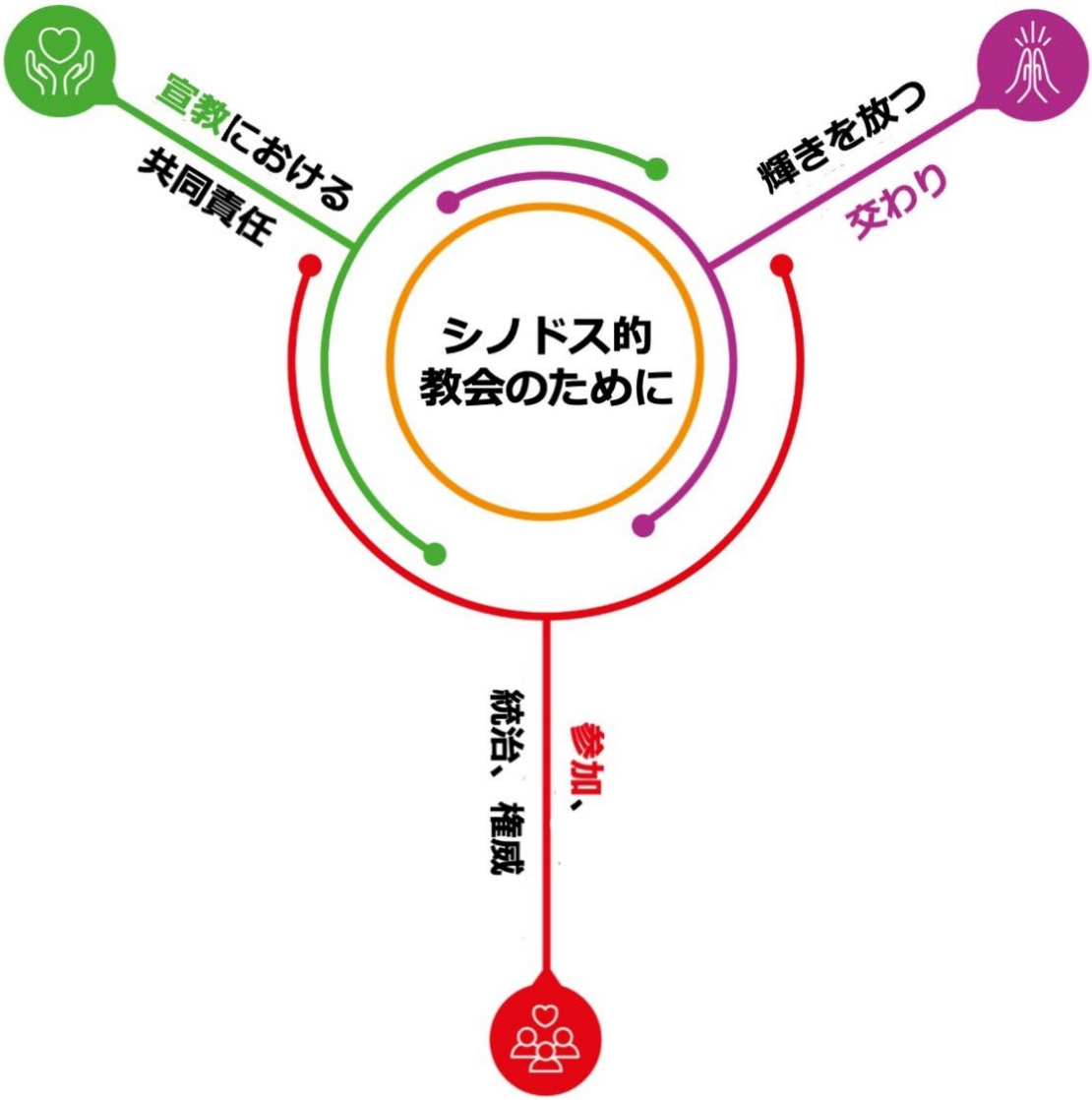
ものであると証明されるでしょう。自分の教会の文脈の豊かさを他者と分かち合うのにもっとも適していると思うものを、各自が選ぶよう招かれています。これが、共通の働きに対する各自の貢献となります。

各ワークシートは、タイトルで示されたトピックに焦点を当て、『討議要綱』に代表される、参照となる枠組みを前提としています。その内容は各事例で繰り返されたり明示的に引用されたりすることはありません。しかしながら、それらは、意見聴取の段階で作成されたすべての文書とともに、作業の基礎となります。「総会の準備のために、シノドスのメンバーは、過去の文書、とくに『大陸ステージのための作業文書』、さまざまな大陸の大陸別総会の最終文書、およびデジタル・シノドスの報告書を心に留め、それらを自らの識別のためのツールとしてそれらを使用するよう求められています」（9項）。したがって、これはゼロから始める問題ではなく、すでに進行している旅を続けることなのです。このため、ワークシートは、スペース上の理由から、各トピックを体系的に扱ったものではなく、また、深く掘り下げた事柄を扱ったものでもありません。シノドスの歩みがいくつかの点を優先事項として強調したといっても、他の問題の重要性が低いことを意味するものではありません。神の民への意見聴取に基づき、ワークシートで提案された問いは、このプロセス全体を動かし、導く基本的な問いに取り組むための入口となるものです。「今日、さまざまなレベル（地方レベルから全世界レベルまで）で行われているこの『ともに旅をする』ことは、教会がゆだねられた使命に従って福音をのべ伝えることを可能にするでしょうか。また、シノドス的な教会として成長するために、聖霊はどのような段階を踏むようにわたしたちを招いているでしょうか」（『準備文書』2 項）。

各ワークシート間には、明らかな接点があり、重なり合う部分もあります。これは、繰り返しの問題ではありません。起草の際、ワークシートは互いに独立して使用できるようにデザインされていることが了解されました。さらにこのことは、カバーするトピック間の相互関係に豊かなネットワークがあることを強調しています。

神の民への意見聴取から生まれた問いの中には、すでに、考慮すべき教導権による、または神学的な教えが存在する課題に関わるものがあります。たとえば、使徒的勧告『愛のよろこび』で扱われている離婚再婚者の受け入れや、典礼秘跡省教令『バリエタテス・レジティメ』（1994 年）の主題である典礼のインカルチュレーションなどがそうです。このような課題について疑問が生じ続けているという事実は、早々に否定されるべきではなく、むしろ識別が必要であり、シノドス総会はそれを行うために恵まれた討議の場です。とりわけ、過去の諸文書で示された歩みの実現を妨げてきた障害について、それが実際のものであれ、そう受け取られているものであれ、検討され、それをどのように取り除くことができるかを考察すべきです。たとえば、その障害が全体的な情報不足に起因するものであれば、コミュニケーションの改善が必要です。一方、問題が、通常の状況にその文書をどう適用するかを把握することが難しかったり、何が提案されているのかを自身で認識できないことに起因している場合、神の民が効果的にそれを受け取るためのシノドスの旅は、適切な対応となりうるでしょう。もう一つの例は、恵みが「あふれ出す」ことが必要になるような、現実や状況変化のしるしとして現れる問いが、再び出現することでしょう。そのためには、「信仰の遺産」と生きた「教会の聖伝」についてさらに考察する必要があります。

シノドス第 16 回通常総会の第 1 会期の作業で、これら多くのテーマについて、結論的なガイドラインを作成することは困難でしょう。したがって教皇は、シノドス総会を 2 回に分けて開催することを決定しました。第 1 会期の主な目的は、シノドスの形態で実施される詳細な研究の道筋を示し、関与すべき関係者を示し、2024 年 10 月の第 2 会期で完了する識別のために実りあるプロセスを確保する方法を示すことです。その後、シノドス的教会としてわたしたちは、どう成長できるかについての提案が、教皇に提示されることになります。


参加、
統治、権威
シノドス的
教会のために
輝きを放つ
交わり
宣教における
共同責任

B 1. 輝きを放つ交わり

神との一致、そして全人類の一致のしるし、道具となるには、
どうすればよいでしょうか。

B 1.1 愛の奉仕、正義への専心、共通の家のケアは、シノドス的教会において、どのように交わりをはぐくむでしょうか。

各大陸別総会は、宣教するシノドス的教会としてわたしたちが成長するために、さまざまな方向性を示しています。

a） シノドス的教会では、貧しい人、つまり一義的な意味で、物質的貧困と社会的排除の状況にある人が中心的位置を占めています。彼らはケアの受け手でありますが、何よりも、共同体全体が聞くべき良い知らせの担い手です。教会は彼らから学び、受け取るべきものがあるのです（ルカ 6・20、『福音の喜び』198 項参照）。シノドス的教会は、彼らの中心的な役割を認識し、大切にします。

b） 共通の家のケアは、共同した行動を求めます。気候変動のような多くの問題の解決には、全人類家族の専心が必要です。わたしたちの共通の家を大切にするためにともに行動することは、他の諸教会や教会共同体のメンバー、他の宗教の信者、善意の人々との出会いと協力のための状況をすでに提供しています。この取り組みは、カテケージスや司牧活動、より良い生活様式の促進、教会の資産（不動産や金融）の管理など、複数のレベルで同時に行動することを求めています。

c） 移住者の動きはわたしたちにとって時のしるしであり、「移住者たちは、現代のわたしたち……の状況に光を照らす『パラダイム』」[10]です。彼らの存在は、カトリック信者がともに歩むための特別な呼びかけとなります。彼らは、移住者たちの出身国の教会との結びつきを生み出すようにとの招きであり、また重要なことには、東方典礼カトリック教会のディアスポラ（離散）を通じてなど、教会の多様性を体験する機会でもあります。

d） シノドス的教会は、とりわけそのメンバーが共通善の構築のために他者とともに歩むことに専心するとき、断片化し偏向した世界に対して預言者的なあかしを提供することができます。深刻な紛争が起きている地域では、和解の仲介者となり、平和の職人となる能力が求められます。

e）「すべてのキリスト者とすべての共同体は、貧しい人々が社会に十全に組み入れられるようにするため、彼らを解放し高める神の道具となるよう呼ばれています」（『福音の喜び』187 項）。これは、もっとも疎外された人々の大義に声を貸し、不正義と差別の状況を非難する一方、そうした不正義の責任を負う人々との共犯関係を避けながら、公の議論の中で彼らの側に進んで立つことを意味します。

識別のための問い

[10] 世界代表司教会議第 15 回通常総会「若者、信仰、そして召命の識別」、『最終文書』2018 年 10 月 27 日、25 項。

ともに歩むとは、誰も置き去りにせず、もっとも苦労している人たちの側にとどまることです。わたしたちは、教会と社会においてもっとも小さくされた人々の帰属と参加を促進することができるシノドス的教会を、どのように築いているでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1） 正義といつくしみのわざは、キリストの宣教に参加する姿です。したがって、洗礼を受けた人は皆、この領域にかかわるよう求められています。キリスト教共同体において、この意識をどのように目覚めさせ、育て、強めることができるでしょうか。

2） 現代世界を特徴づける不平等は、教会内にも存在し、たとえば、豊かな国と貧しい国の教会や、同じ国のもっとも豊かな地域ともっとも貧しい地域の共同体を分断しています。このような不平等を克服し、地方教会としてともに歩み、たまものを真に分かち合う体験をするには、どのようにすればよいでしょう。

3） シノドスの歩みの中で、最貧困層の声を受け入れ、彼らの意見を取り入れるために、どのような努力がなされてきたでしょう。もっとも疎外された人々の帰属と参加を支援する方法について、わたしたちは何を学んできたでしょうか。ともに歩んでいく上で、彼らがより深く関与できるようにするためには何が必要で、また、わたしたちの仕方では、彼らが十分に受け入れられてない場合、彼らの声がそれを問い直すにはどのようにすればよいでしょう。

4） 移住者を迎えることは、とくに同じ信仰を共有するとき、どのようにして異文化の人々とともに歩むチャンスとなりうるでしょう。現場における司牧の中で、移住者の共同体のためにどのような準備がなされているでしょうか。東方典礼カトリック教会のディアスポラ（離散）はどのように評価され、その存在は、どのようにすれば多様性の中の一致を体験する機会となりうるでしょう。送り出し国と受け入れ国の教会の間にどのようなつながりを作ることができるでしょう。

5） キリスト者の共同体は、社会全体が共通善を築くためにともに歩む方法を知っているでしょうか。それとも、自分たちの既得権のみを守ろうとするでしょうか。キリスト者の共同体は、政治的対立を超えた一致の可能性をあかしすることができるでしょうか。その働きのために、祈りと養成を通して、どのように準備していくでしょうか。共通善のために働くには、連携や連立を組むことが必要です。識別するために、どのような基準を用いればよいでしょうか。共同体は、政治に携わるメンバーにどのように伴走するでしょうか。

6） カトリック教会以外の他者（個人、グループ、運動体）と、共通の家のケアをともに歩む、どのような体験があるでしょう。何を学びましたか。わたしたちの共通の家を効果的にケアするため、必要な諸レベルでの行動を調整するために、どのように前進していますか。

7） 貧しい人、疎外された人とともに歩むには、耳を傾ける姿勢が必要です。教会は、この奉仕を担う人々のために、耳を傾け伴走する、特定の奉仕職を認定すべきでしょうか。シノドス的教会は、このように伴走する人々をどう養成し、支援することができるでしょう。公正な社会に貢献し、わたしたちの共通の家をケアする、真の召命を有する人々に、わたしたちはどのように教会としての認定を与えることができるでしょう。

B 1.2 シノドス的教会は、「いつくしみとまことは出会う」（詩編 85・11）という約束を、どのように信憑性のあるものにできるでしょうか。

歓迎と同伴を通して主と出会うというキリスト者の召命がもつ、真の、具体的な意味を理解することは、シノドスの旅の第 1 フェーズにおける中核的な関心事として浮上しました。

『大陸ステージのための作業文書』は聖書の「広げられた天幕」（イザヤ 54・2 参照）というイメージを選び、それは、よく地に足の付いた、同時に開かれた共同体となるようにという呼びかけを表現しています。各大陸別総会は、それぞれの多様な文脈から、教会の宣教の中核をなす、受け入れの次元をとらえる他の豊かなイメージを提案しました。アジアは、神と隣人に出会うために準備する謙遜さのしるしとして、敷居をまたぐために靴を脱ぐ人のイメージを提示しました。オセアニアは、舟のイメージを、アフリカは、神の家族としての教会のイメージを提案し、それらは、あらゆる多様性の中で、すべてのメンバーに、帰属と受け入れを提供できることを表しています。

この多様性の中に、目的の一致を見出すことができます。どこであっても教会は、歓迎し、もてなす共同体となるという使命を刷新する方法を探し求め、その結果、歓迎する人々の中でキリストと出会い、すべての人の生活の中でキリストの現存のしるしとなり、福音を信頼できる形で告げ知らせるのです。主であり師であるキリストに倣い、「大胆にその本物の教えを告げ知らせると同時に、……根本的に包摂し受容するというあかしを提供する」（『大陸ステージのための作業文書』30 項）という、一見逆説的に見えることを生き抜くことができる能力が、深く求められているのです。

この点で、シノドスの道は、謙虚さと誠実さをもって、深く出会う機会となってきました。シノドスという形式によって、この出会いから生じる問いが宣教の観点の中に位置づけられるようになっていることを発見し、驚いている人もいます。これらの出会いは、麻痺へとつながるのではなく、シノドスがこの宣教の刷新の触媒となり、教会の関係性という織物を修復するよう促す希望を育ててくれました。

真に受け入れたいという思いは、多様な状況にあるシノドス参加者から表明された感情です。

a) 各大陸別総会の最終文書は、離婚再婚者、一夫多妻制の人々、LGBTQ+のカトリック信者など、教会に受け入れられていないと感じる人々についてしばしば言及しています。
b) また、「神の民」にも存在する人種、部族、民族、階級、カーストによる差別が、いかに共同体の中で、自分は重要ではなく歓迎されていないと感じる人を生んでいるかも指摘しています。
c) 障害のある人を排除するさまざまな実践的、文化的障壁が広く報告されており、それは克服されねばなりません。
d) また、「よい知らせ」が第一に向けられるべきもっとも貧しい人々が、キリスト者共同体の周縁部に置かれていることがあまりにも多いという懸念も浮かび上がっています（たとえば、移住者や難民、ストリート・チルドレン、ホームレスの人、人身取引の犠牲者など）。
e) 大陸別総会文書は、シノドス的回心と虐待からの生存者や教会内で疎外されている人々へのケアとの間のつながりを維持することが必要であると留意しています。各大陸別総会は、教会のメン

バーによって傷つけられた人々、とりわけ、あらゆる形態の虐待の被害者と生存者に対するケアの一形態として、正義を実践することを学ぶことに大きな強調点を置いています。

f) もっとも無視されている人の声に耳を傾けることが、福音がわたしたちに求める、愛と正義において成長するための方法であると理解されています。

識別のための問い

無条件の愛ですべての人とともに歩み、福音の真理の十全さを告げ知らせる主であり師であるキリストにこれまで以上に倣うために、シノドス的教会はどのような段階を踏めるでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1） わたしたちはどのような姿勢で世界と接しているでしょうか。良いものを認めると同時に、人間、人類共同体、被造界の尊厳を侵すあらゆるものを、預言者として糾弾する態度を明確にしているでしょうか。

2） わたしたちの共同体をこれ以上分断することなく悪を暴くため、預言者の声でどう語ることができるでしょう。どのようにすれば、対立に誠実に対処し、論争のための空間を恐れず確保する教会になれるでしょうか。

3）「誰かについて話したり、ただ一方的に話すのではなく、人々とともに歩みながら」、教会の宣教の核心として、親密で思いやりのある関係性を、どう回復できるでしょうか

4） シノドス後の使徒的勧告『キリストは生きている』の精神に基づき、わたしたちはどのように若者とともに歩むことができるでしょう。どのようにすれば、「若者の優先的選択」をわたしたちの司牧戦略とシノドス的生活の中心に据えられるでしょう。

5） 奉仕職や教会の責任を負っていた人物による性虐待や霊的、経済的、権力、良心の虐待の被害者や生存者に正義をもたらすため、わたしたちは意味ある具体的な措置を、どのように継続することができるでしょう。

6） 教会から傷つけられ、地域社会から歓迎されていないと感じている人々が、認められ、受け入れられ、自由に質問でき、裁かれないと感じられる空間をどのように作り出せるでしょうか。シノドス後の使徒的勧告『愛のよろこび』に照らし、身分やセクシュアリティのために教会から排除されていると感じている人々（たとえば、離婚再婚者、一夫多妻の人々、LGBTQ+の人々など）を歓迎するには、どのような具体策が必要でしょう。

7） 長年教会の一部でありながら、しばしば周縁部に置かれていた移住者や難民、人種的・文化的マイノリティ、先住民族の共同体に対し、わたしたちはどのようにすれば、より開放的で受け入れる姿勢がとれるでしょうか。教会は、どうすれば彼らの存在をたまものとして、よりよく受け入れることができるでしょう。

8） 障害のある人々が共同体の完全なメンバーであると感じられるようにするためには、どのような物理的、文化的障壁を取り除く必要があるでしょうか。

9）キリスト者共同体や社会での生活に対する高齢者の貢献を高めるにはどうすればよいでしょう。

B 1.3 諸教会間でたまものを与え合うという活力ある関係性は、どのように発展していけるでしょう。

教会が招かれている交わりは、たまものを与え合うという活力ある関係性であり、多様性の中で超越的な一致をあかしするものです。これまでのシノドスの旅でもっとも重要なたまものの一つは、わたしたちの多様性の豊かさと相互の結びつきの深さを再発見したことです。多様性と相互の結びつきは脅威となるものではなく、むしろわたしたちの被造界、召命、運命の一致をより深く受け止めるための文脈を提供するものです。

シノドスの歩みは、とくに霊における対話の機会があった場合には、教会の地方レベルでも活気ある熱のこもった形で体験されてきました。『大陸ステージのための作業文書』は、文脈を超えて浮かび上がった課題やテーマが驚くほど収斂していることを強調し、この活気を捉えようと努めました。大陸別総会では、まったく異なる文脈の教会生活の側面が、貴重なたまものとして見出されると同時に、各大陸は、そのさまざまな地域を特徴づける多様性とより深い関係性を築きました。こうした中には、その大陸内の隣人同士の違いや、ラテン典礼と東方典礼のカトリック教会が一つの地域を共有しているところでの多様なカトリック性の表現が含まれ、それはしばしば、カトリック移住者の波やディアスポラとなった共同体形成の結果として見られます。ある大陸別総会が述べたように、わたしたちは自分たちが「諸共同体の共同体」であることを非常に具体的な形で体験してきました。それが生み出しうるたまものと緊張についても指摘しています。

このような出会いが、共通の所見や明確な要望につながっています：

a） ラテン語や西洋からの声に支配されがちな教会や神学に関する対話の中で、特定の地域や教会の異なる伝統をよりよく聞き、認識することが望まれます。洗礼を受けた人の尊厳は多くの状況で重要なポイントとして認識されており、同様に、とくに東方典礼カトリック教会の多くのメンバーにとって、キリスト教入信の秘跡で祝われる過越の神秘は、キリスト者としてのアイデンティティとシノドス的教会に関する考察の焦点であり続けています。

b） 東方典礼カトリック教会には、正教会と共有する、長くて優れたシノダリティの経験があり、その伝統に、彼らは今回のシノドスの歩みの議論と識別において注意を払いたいと考えています。

c） 同様に、ディアスポラにいる東方典礼のキリスト者が、正教会の兄弟姉妹とともに、新しい文脈で直面する具体的で特殊な現実があります。ディアスポラにある東方典礼カトリック教会が、そのアイデンティティを維持し、民族的共同体を超えた存在として、つまり、グローバルな文脈の中で現代教会の宣教に貢献する、豊かな霊的、神学的、典礼的伝統を有する「自治権を有する（*sui iuris*）」教会として認められることが望まれているのです。

識別のための問い

その文脈における宣教の主体である各地方教会は、唯一のカトリック教会としての地平の中で、他の地方教会とたまものを与え合うことをどのように向上させ、促進し、統合することができるでしょうか。一致と多様性の調和のとれた関係の中で、それぞれの独自性を維持しながら、教会のカトリック性を促進するために、地方教会はどのように援助を受けることができるでしょうか？

祈りと準備の内省のために

1）教会は唯一の、普遍のものですが、すでに、そして最初から、豊かで多くの形態をもつ多様性を有しているという認識をどのように高めていけるでしょうか。

2）典礼、霊性、司牧、神学的考察といった各分野において、教会的なたまものを相互に与え合うことから恩恵を受け、教会的交わりを表すために、すべての地方教会がどのような姿勢で互いにホスピタリティを示すことができるでしょう。とりわけ東方典礼とラテン典礼のカトリック教会の間のシノダリティに関する体験やビジョンの交換をどのように促進できるでしょうか。

3） 東方典礼カトリック教会の霊的、神学的、典礼的伝統に対して、ラテン典礼の教会はどのようにしてより開かれた態度をとることができるでしょうか。

4）ディアスポラの東方典礼カトリック教会は、どのようにすれば自分たちのアイデンティティを保ち、単なる民族的共同体以上の存在として認められるでしょうか。

5） いくつかの教会は、非常に不安定な状況に置かれています。使徒パウロがギリシャの共同体に、エルサレム教会を寛大に支援するよう求めた次の教えを実践するために、他の教会はどのように彼らの苦しみを引き受け、彼らのニーズに応えることができるでしょう。「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです」（二コリント 8・14）。この点で、国際機関や慈善活動に専念する聖座の機関は、どのような役割を果たすことができるでしょう。

6）普遍教会のレベルでの教導権による教えと教会法の規範の中で、地方教会からの意見と体験をどのように考慮し、評価することができるでしょう。

7） グローバル化、相互接続がますます進む世界で、同じ地域、また異なる大陸の地方教会間の関係性をどのように発展させることができでしょう。人の移動が増え、移住者の共同体が存在する中で、どのようにして教会間のつながりを築き、たまものを与え合う機会となりうるでしょう。異なる文化や伝統をもつ信者の間に生じうる緊張や誤解に、どう建設的に対処することができるでしょうか。

8） 聖座の下部組織やローマ教皇庁の省をはじめとする教会のグローバル機関は、どのようにして教会間のたまものの循環を促進することができるでしょう。

9） 体験とたまものを与え合うことを、異なる地方教会間だけでなく、奉献生活の会や使徒的生活の会、信徒団体や運動体、新しい共同体など、神の民の中の異なる召命、カリスマ、霊性の間で、どのようにして活発で実りあるものにできるでしょうか。この交流に、観想修道会の参加をどう確保することができるでしょうか。

B 1.4 新たなエキュメニカルな取り組みを通して、シノドス的教会はどのようにその使命を果たすことができるでしょうか。

「エキュメニズムの歩みがシノドス的であるように、カトリック教会が歩んでいるシノドスの道は、エキュメニカルであり、そうでなければなりません」[11]。エキュメニズムが何よりもまず、他のキリスト者とともに旅する共通の道（*syn-odos*）であるように、シノダリティは、キリストを信じるすべての人にかかわる共通の課題です。シノダリティとエキュメニズムは、より良いキリスト教のあかしという共通の目標をもち、ともに進むべき二つの道です。これは、混宗婚を通して、また、殉教のエキュメニズムの中で、キリストへの信仰のあかしとしていのちを明け渡すという究極の行為を通してなど、さまざまなレベルの「生活のエキュメニズム」における共存の形をとりえます。

シノドス的教会を建設する取り組みには、いくつかのエキュメニカルな意味があります：

a） 唯一の洗礼によって、すべてのキリスト者は信仰の感覚（*sensus fidei*）（信仰の超自然的感覚、『教会憲章』12 項参照）にあずかることとなります。

b） エキュメニカルな旅は「たまものを与え合うこと」であり、カトリック信者が他のキリスト者から受け取ることができるたまものの一つは、まさに彼らのシノドス的な体験です（『福音の喜び』246 項参照）。教会の構成要素の次元としてのシノダリティの再発見は、とくに正教会とのエキュメニカルな対話の一つの実りです。

c） シノダリティの実験場としてのエキュメニカル運動。とりわけ、エキュメニカル運動のさまざまなレベルで体験された対話と合意形成の方法論は、ひらめきの源泉となりえます。

d） シノダリティは、教会の「継続的刷新」の一部であり、というのも、それは主として内部改革を通してであり、その中でシノダリティは、カトリック教会が他のキリスト者により近づいていくという本性的な役割を果たします（『エキュメニズムに関する教令』4、6）。

e） カトリック教会のシノドス的な秩序づけとエキュメニカルな取り組みの信頼性との間には相互関係があります。

f） 異なる共同体のキリスト者が、イエス・キリストの名において、共通の祈り、活動、共通のあかしや、また、定期的な意見聴取や互いのシノドス的歩みへ参加するために集うときはいつでも、教会間のある一定のシノダリティが体験されます。

各大陸別総会の最終文書はすべて、シノダリティとエキュメニズムの密接な関係を強調しており、中には全章を割いているものもあります。実際、シノダリティとエキュメニズムはともに、神の民全体の洗礼による尊厳に根ざしています。それらはともに、宣教するシノドス的教会のビジョンへの新たな専心を呼び起こします。これらは耳を傾けることと対話の歩みであり、画一的ではなく、正当な多様性の中の一致である交わりのうちに成長するようわたしたちを招いています。わたしたちのさまざまなレベルでの決断や行動は、キリストのからだであるメンバー全員に影響を与えるので、共同責

[11] 教皇フランシスコ「マール・アワ三世・アッシリア典礼カトリック教会総大司教への挨拶」（2022 年 11 月 19 日）。

任の精神の必要性が強調されます。それは、記憶のいやしへと向かう回心の対話における、悔い改め、ゆるしと和解の霊的プロセスです。

識別のための問い

エキュメニズムの旅の体験と成果は、よりシノドス的になるカトリック教会を築くためにどのように役立つでしょう。シノダリティは、「すべての人を一つにしてください……そうすれば、世は、……信じるようになります」（ヨハネ 17・21）というイエスの祈りに、カトリック教会がよりよく応えるためにどのように役立つでしょう。

祈りと準備の内省のために

1） このシノドスは、他の諸教会や教会共同体から学び、「聖霊が彼らのうちに蒔いたもの、わたしたちにとってたまものとなるものを刈り取る」（『福音の喜び』246 項）機会です。他のキリスト者やエキュメニカル運動によるシノドス的体験から、カトリック信者は何を（再び）学ぶことができるでしょうか。

2） エキュメニカル運動に対する神の民全体の積極的参加を、どのように促進することができでしょう。とくに奉献生活者、混宗婚の夫婦や家族、若者、教会運動体、エキュメニカルな共同体の重要な貢献をどのように採り入れることができるでしょう。

3） 他の諸教会や教会共同体との関係において、どのような領域で「記憶のいやし」が必要でしょう。どのようにして「新たな記憶」をともに築いていくことができるでしょう。

4）あらゆる伝統のキリスト者と「ともに歩む」ことは、どのように改善されうるでしょう。ニケア公会議 1700 周年（325-2025 年）の共同での記念は、そうした機会をどう提供できるでしょうか。

5） 「一致のための司教の奉仕職は、シノダリティと密接に関連しています」[12]。「一致の目に見える根源であり、基礎」（『教会憲章』23 項）である司教は、その地方教会において、どのようにシノドス的にエキュメニズムを推進することが求められているしょう。

6） 現在進行中のシノドスの歩みは、「首位の権限の本質は何も損なわないで、しかもなお、新しい状況に対応できる何らかの形式を見いだす」[13]ために、どのように貢献できるでしょう。

7）東方典礼カトリック教会は、共通のシノドス的でエキュメニカルな取り組みにおいて、ラテン典礼の教会をどのように助け、支え、刺激することができるでしょう。ラテン典礼教会は、ディアスポラの東方典礼のカトリック信者のアイデンティティをどう支え、促進していけるでしょうか。

8） 教皇フランシスコのエキュメニカルの標語、「ともに歩み、ともに働き、ともに祈る」[14]は、シノドス的な仕方によるキリスト教一致の新たな取り組みをどのように鼓舞することができるでしょう。

---

[12] 教皇庁キリスト教一致推進評議会『司教とキリスト教一致：エキュメニカル手引書』2020 年 6 月 5 日、4 項。

[13] 聖ヨハネ・パウロ二世教皇回勅『キリスト者の一致』1995 年 5 月 25 日、95 項。『福音の喜び』32 項と『エピスコパリス・コムニオ』10 項に引用。

[14] 教皇フランシスコ「エキュメニカルな祈りでの演説」WCC エキュメニカルセンター、ジュネーブ、2018 年 6 月 21 日。

B 1.5 福音に照らし、諸文化の豊かさを認め収集し、諸宗教間の対話を発展させるにはどうすればよいでしょうか。

人々の声に耳を傾けることは、あらゆる文化が絶えず進化しているという理解のもと、彼らが組み込まれている文化に耳を傾ける方法を身につける必要があります。シノドス的教会は、霊は教会に、どんな文化も例外なく受け入れられる幅を与えているという確信から行われる識別を通じて、各地の文化や文脈において、福音をより明確に表現する方法を学ぶ必要があります。その証拠に、各地の教会はすでに大きな多様性を特徴としており、それは祝福です。その中には、異なる国籍や民族、東方と西方教会の伝統の信者が共存しています。この豊かさは、いつも共存しやすいわけではなく、分裂や対立の原因となることもあります。

さらに現代は、デジタル環境と新しいメディアという新たな文化が圧倒的に浸透していることが特徴です。「デジタル・シノドス」の取り組みが示すように、多くのキリスト者、とくに若者の活動を通して、教会はすでにそこに存在しています。しかし、相変わらず足りないのは、こうした環境が福音化にもたらす可能性を十分に認識することや、とくに人類学的な観点から、この環境がもたらす課題について考察することです。

準備段階の作業の中で、さまざまな緊張が生じました。これらは圧倒するものではなく、ダイナミズムの源泉としてかかわることができるものです。

a） 異なる経験や態度をもつ、福音と地方文化との関係性において。普遍教会の伝統を採り入れることは、地域の文化への押しつけ、あるいは植民地主義の一形態であると考える人がいます。また、霊はあらゆる文化に働きかけ、キリスト教信仰の真理を表現する能力をすでに与えていると考える人もいます。さらに、キリスト教以前の文化実践をキリスト者が採用したり適応したりすることはできないと考える人もいます。

b） キリスト教と諸宗教の関係性において。非常に実りある、諸宗教の信者との対話やかかわりの体験もある一方、困難、限界、不信の兆候が現れ、さらには紛争や直接的、間接的な迫害が起こる地域もあります。教会は、平和、和解、正義、自由を促進する架け橋になりたいと願っていますが、大いなる忍耐をもって事態が変化することに期待しなければならない状況も存在します。

c） 一方では教会と西洋文化との関係性において、他方、教会と種々の形の文化的植民地化との関係性において。世界には、信仰に反する前提に基づいた哲学的、経済的、政治的イデオロギーに基礎を置く、教会の宣教に反対する力が働いています。誰もがこうした緊張を同じように受け止めているわけではなく、たとえば、世俗化の現象について脅威ととらえる人もいれば、機会ととらえる人もいます。こうした緊張は還元主義的に、変化を望む人々とそれを恐れる人々との間の衝突として解釈されることもあります。

d）先住民族共同体と西洋の宣教活動モデルとの関係性において。多くのカトリック宣教師は、信仰を伝えることに多大な献身と寛大さを示してきましたが、彼らの行動が、現地の文化が教会を建てるのに本来の貢献をする可能性を妨げてきたケースもありました。

e） キリスト教共同体と若者との関係性において。彼らの多くは、教会の文脈で採用されている言語が彼らにとって理解不能に思えることがあり、排除されていると感じています。

こうした緊張は、まず地方レベルの識別を通して対処しなければならず、あらかじめ用意された解決策はありません。大陸別総会は、個人と共同体による、助けとなる多くの心構えを強調しています。つまり、謙遜と尊敬の態度、聞き取りの能力や霊における真の対話を促進する能力、教会生活の具体的な形に関しても、死と復活という過越のダイナミズムを受け入れ、変化する用意があること、地域におけるさまざまな感性や霊性が対立しているようなときに文化を識別する訓練や、異なる諸文化の人々に同伴する訓練、そうしたものがこれに当たります。

識別のための問い

現代の男女がキリストとの出会いをはぐくむため、わたしたちはどのようにして異なる文脈や文化の中で効果的に福音をのべ伝えることができるのでしょう。出会いと対話の文化を築くため、他の諸宗教の信者とどのような絆を築くことができるでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1） 地方教会は、自分たちが組み込まれている文化を読み解くために、どのようなツールを使っているでしょう。福音に照らし、どのように地域の諸文化を尊重し、大切にすることができるでしょう。地域の文化に照らして教会の教えを読み直すために、どのような機会を作ることができるでしょう。

2） マイノリティや移住者の文化が地方教会で表現されるために、どのような空間が用意されているでしょう。

3） さまざまな教区、司教協議会、大陸別総会が、地域の文化に合わせて共同体生活、とくに典礼を再形成できるようにしたいという希望を表明しています。こうした願いに応えるため、どのようなシノドスのダイナミズムを取り入れることができるでしょう。

4） 文化の識別に関する養成はどのように促進されるでしょうか。カリスマと召命の「翻訳者」、つまり宗教、文化、人間の架け橋となる人を、どのように育て、教育し、認証していけるでしょうか。

5） 他の宗教との和解と平和のために、どのような態度をとるよう求められていると感じますか。教会は偏見、緊張、対立に対し、どのように建設的に対処しますか。教会がマイノリティの国で、信仰のあかしを弱めることなく、またキリスト者を不必要な脅威や迫害にさらすことなく、どのように福音をあかしすることができるでしょう。

6） 教会は、率直で、預言者的で、建設的な仕方で、あらゆる形態の植民地主義を避けながら、教会内部のものを含めて、西洋文化や他の諸文化に、どのようにかかわることができるでしょう。

7）世俗化した社会は、ある人にとっては反対すべき脅威であり、ある人にとっては受け入れるべき事実であり、さらにある人にとってはひらめきとチャンスの源泉です。教会がこの世のものとなることなく、世界と対話し続けるにはどうすればよいでしょう。

8） デジタル環境の中で、どのようにして識別の機会を作ることができるでしょう。地理的次元をもたない環境の中で、福音化の目的のために、どのような形で協力し、どういう組織を作る必要があるでしょう。

B 2. 宣教における共同責任

福音への奉仕のため、たまものと働きを、いかにより適切に分かち合えるでしょうか。

B 2.1 宣教の意味と内容の認識を共有するため、わたしたちはどう、ともに歩めるでしょう。

霊のたまものによって、福音を告げ知らせ、キリストを現存させることは、教会の使命です。この働きは洗礼を受けたすべての人に属し（『福音の喜び』120 項参照）、つまり、シノダリティはその成り立ちとして宣教的であり、宣教そのものがシノドス的な活動です。わたしたちは、この呼びかけに応える中で成長し、教会がその宣教を実行する仕方をシノドス的に刷新するよう、絶えず招かれています。大陸別総会の考察では、この宣教は、『福音宣教』が推進し、『福音の喜び』が取り上げた総合的視点において、互いに対立せず、調和すべき多様な側面を明示しています。たとえば……、

a）説教の質と典礼用語を強調し、みことばと秘跡を通じた宣教の場として、地方教会の典礼生活の刷新を心から求めること。後者は、教会の一致、それも典礼の一致で表現される一致と、適切なインカルチュレーションを考慮に入れた、正統な多様性との間の、絶妙なバランスを必要とします[15]。

b）貧しい教会、そして、苦しむ人に寄り添い、親しみと愛によって福音を伝えることのできる教会への望みが強調されています。主の足跡をたどるこのあかしは、殉教にまでおよぶ、「サマリア人」としての教会の召命を表しています。教会が傷を負わせる状況や、教会自らが傷を受ける状況について、関係者が適切にケアされない限り、これらの状況は、神の愛と福音の真理をあかしする教会の足かせとなります。

c）新たな、破壊的な植民地主義に預言者的に対抗するカギは、仕えられるためではなく、仕えるために来られたキリスト（マルコ 10・45 参照）に倣って、無条件の奉仕の場を開くことです。このような場は、人間の基本的なニーズが満たされる場であり、人々が歓迎され、裁かれることなく、わたしたちの希望の理由について自由に質問でき（一ペトロ 3・15 参照）、自由に出たり戻ったりできる場です。シノドス的教会にとって、宣教はつねに、他者のためにというより他者とともに築きます。

d）デジタル環境において、教会は福音化の機会を見出していきます。この空間で人間関係のネットワークを構築することで、人々、とくに若者がともに歩む新しいやり方を体験できるようになると分かっています。「デジタル・シノドス」の取り組みは、現代世界を形づくるメディア・ネットワークにおいてさえ、コミュニケートする存在としての人間の現実に、教会の注意を喚起するものです。

宣教への責任を深めたいという願いは、キリスト教共同体の限界を意識したり、その失敗を認めたりすることによって妨げられることはありません。それどころか、信仰、希望、愛のうちに自分の殻から出るという行動は、この不完全さに対処する方法です。しかしながら、こうした願いを確認すると同時に、大陸別総会は、教会の宣教の意味、範囲、内容や、その多様な表現を明らかにする基準について、明確さと共通理解が欠けていることも訴えています。このことは、わたしたちがともに歩むことを妨げ、わたしたちを分裂させかねません。したがって、新たな養成の方法や、教会の豊かさを

[15] 典礼秘跡省教令『バリエタテス・レジティメ』1994 年 1 月 25 日参照。

構成するさまざまな視点、霊性、感性の間の出会いと対話の場が、シノドスのカギの中に求められます。

識別のための問い

今日の教会は、確信と自由な精神と有効性をもって福音をのべ伝えるため、どのような準備と備えがあるでしょう。シノドス的教会の視点は、どのように宣教理解を変え、そのさまざまな側面を明確にすることを可能にするでしょう。ともに宣教を達成した体験は、どうシノダリティ理解を豊かにするでしょう。

祈りと準備の内省のために

1）共同体の典礼生活は、宣教の源泉です。奉仕職、カリスマ、召命を充実させ、歓迎と帰属の場を提供することによって、その刷新をシノドス的な仕方でどう支援できるでしょうか。

2）説教、カテケージス、司牧活動は、どのように宣教の意味と内容に関する共通認識を促すことができるでしょう。宣教が洗礼を受けたすべての人にとって現実的で具体的な呼びかけであることを、どう伝えることができるでしょう。

3）司教協議会と大陸別総会のまとめは、若者と家族を司牧の対象ではなく、主体として認識する「優先的選択」を繰り返し求めています。2014–15 年と 2018 年のシノドスのまとめを実践することを含め、こうした宣教する教会のシノドス的刷新は、どう形づくることができるでしょうか。

4） 神の民の大多数にとって、宣教は「現世的なことがらに従事し、それらを神に従って秩序づけ」（『教会憲章』31 項。『信徒使徒職に関する教令』2 項も参照）ることによって成就します。職業上の、社会的な、政治的な取り組みやボランティア活動が、宣教が実施される領域であるという気づきをどう高めることができるでしょう。とりわけ、敵対的で困難な環境の中で、この宣教を遂行する人々に、わたしたちはどうよりよい形で同伴し、支援することができるでしょう。

5） 教会の社会教説は、しばしば専門家や神学者に許された特権とみなされ、共同体の日常生活から切り離されています。宣教のための資源として、神の民がその教義を再び活用することを、どのように奨励すればよいでしょうか。

6）デジタル環境は今や社会生活を形づくっています。この空間で、教会はどのようにしてより効果的にその宣教を遂行することができるでしょう。福音の告知、同伴、ケアは、こうした環境の中でどのように再考されるべきでしょう。このような環境の中で宣教に取り組む人々をどのように理解し、彼らのために新しい養成コースを作成することができるでしょうか。こうした空間で、とくに教会の宣教に共同責任を負っている若者の先駆的活動を、いかに勇気づけられるでしょうか。

7） 多くの地域で宣教を行うには、他の諸教会や教会共同体の信者、他宗教のメンバー、そして善意の男女など、異なるひらめきをもつ多様な人々や組織と協力する必要があります。彼らと「ともに歩む」ことからわたしたちは何を学び、それを実行するためにより良く準備するには、どうすればよいでしょうか。

B 2.2 シノドス的教会がまた、「全員が奉仕職を担う」、宣教する教会となるためには、何が行われるべきでしょうか。

すべての大陸別総会は、しばしば豊かで示唆に富む用語で、教会における奉仕職を議論します。シノドスの歩みは、奉仕職に関する肯定的ビジョンを提供し、対立を生み出すことなく、より広義の教会の奉仕職的性質（*ministeriality*）の中に叙階された奉仕職を位置づけています。しかし、大陸別総会は、キリストの預言職、祭司職、王職に参与する神の民の中で、新たに登場するカリスマや、（制定された、特別の、事実上の）洗礼による奉仕職を行使する適切な形態を識別する緊急の必要性をも指摘しています。叙階された奉仕職との関係性や、シノドス的教会における司教の働きについては、別のワークシートに場を設ける一方、このワークシートは、これらの奉仕職に焦点を当てます。具体的に言うと……、

a）教会におけるあらゆる能動的機能を聖職者（司教、司祭、助祭）だけに留保し、洗礼を受けた人々の参加を従属的協力へとおとしめる、というビジョンを克服する明確な呼びかけが存在します。叙階の秘跡の評価を減ずることなく、シノドス的地平における奉仕職は、教会全体の奉仕職概念から理解されるものです。すべての人による教会生活への参加を基盤として洗礼による尊厳を認めることで、第二バチカン公会議を落ち着いて受容できるのです。洗礼による尊厳は、洗礼による奉仕職の根源としての共通祭司職と直ちに結び付くものであり、また、共通祭司職と役務的祭司職に不可欠の関係性があることは、双方が「それぞれ独自の方法で」、「キリストの唯一の祭司職に参与」しつつ、「相互に秩序づけられ」（『教会憲章』10 項）ていることから、再確認されています。

b） キリストの祭司職へのすべての人の参与を実現し、同時に洗礼による奉仕職と叙階された奉仕職の特殊性を大切にするもっとも実りある場は、地方教会であることが強調されています。ここでは、特定の社会的、文化的、教会的状況において、どのカリスマと奉仕職がすべての人のために有益であるかを識別することが求められています。社会、文化、経済、政治生活のさまざまな領域における福音化に信徒が特別に参加するには、新たな推進力とより鋭敏な能力を与える必要があり、彼らが自らの責任を引き受けると同時に、地方教会の生活の中で、異なるカリスマをもつ男女の奉献生活者の貢献を強化する必要があります。

c） 地方教会でともに歩む体験は、シノドス的教会で働く新しい奉仕職を想像することを可能にします。非常に多くあることですが、大陸別総会は、『教会憲章』10–12 項の文書、ビジョン、言語を参照しながら、洗礼による奉仕職をより深く理解し、教会のさまざまなレベル間の補完性の諸形態を実行することによって、これをよりよく表現することを求めています。このような意味で、洗礼による奉仕職に関するこれらの問いの多くは、地方教会におけるより掘り下げたシノドスの活動を通して答えることができるでしょう。そこでは、キリストの三職（*tria munera*）へそれぞれ異なる形で参与するという原則に基づけば、共通祭司職と役務的祭司職との間の相補性を明確にし続けることが容易となり、これによって共同体に必要な、洗礼による奉仕職を識別することができます。

d） 全員が奉仕職を担う教会は、必ずしも完全に制度化された奉仕職の教会ではありません。多くの奉仕職は、洗礼による召命に正当に由来するものであり、そこには自然発生的な奉仕職、制度化され

ていない認証された奉仕職、制度化されたことで特定の養成、使命、安定性をもつ奉仕職が含まれます。シノドス的教会として成長するには、世界への奉仕のため、時のしるしに照らして、どのような奉仕職を創設、または促進すべきかをともに識別する取り組みが必要です。

識別のための問い

宣教のためのカギの中で、洗礼を受けたすべての人の召命、カリスマ、奉仕職がより十全に実現されるような、教会における有意義で効果的な共同責任に向けて、わたしたちはどのように進めばよいでしょうか。よりシノドス的な教会がまた、「全員が奉仕職を担う教会」でもあることを保証するために、何ができるでしょう。

祈りと準備の内省のために

1）教会の生活と宣教における能動的な主体として、すべての人の参加と共同責任をあかしし、促進する機会とするため、洗礼、堅信、聖体をどのように祝うべきでしょうか。叙階を受けた奉仕職だけに限定されない奉仕職の理解を、どのように刷新できるでしょう。

2）制度化されているかどうかにかかわらず、地方教会における宣教に必要な洗礼による奉仕職をどのように識別できるでしょう。地方レベルで実験するためには、どういった空間が利用できるでしょうか。これらの奉仕職にどういう価値を見出すべきでしょうか。どういった条件下で、これらの奉仕職を教会全体が受け入れ、認証することができるでしょうか。

3）奉仕職的性質（*ministeriality*）と奉仕職に関して、他の諸教会や教会共同体から何を学ぶことができるでしょうか。

4）共同責任は主に、すべての人が宣教へ参加する中で現れ、実現されます。とりわけ地方教会において、共同体への責任と教会生活の調和にもっとも役立つように、異なるカリスマや召命をもつ人々の特定の貢献をどのように拡大していくことができるでしょうか。こうしたカリスマや召命には、職業上のものを含む個人のスキルや能力から、修道会や奉献生活の会、使徒的生活の会、諸運動体、諸団体などの創立の精神に至るまでの幅があります。

5）さまざまな理由で共同体生活の周縁にありながら、福音の論理に従いかけがえのない貢献をしている信者たちとともに、共同で責任をもつ宣教に効果的に参加する空間と瞬間をどのように作り出せるでしょうか。（ここには、高齢者や病者、障害のある人、貧困にあえぐ人、公教育を受けられなかった人なども含まれます）

6）多くの人々が、真の召命と人生の選択への応答として、公正な社会の建設と共通の家へのケアに専心し、より高給で、世間に認められた、安定した職業という、他の選択肢を手放しています。これは単なる個人的な行動ではなく世界に対する教会のケアの実現である、ということを明らかにできるような仕方でこの専心を理解するには、どのようにすればよいでしょう。

B 2.3 女性の、洗礼による尊厳をより深く理解し、促進することによって、現代の教会はどのようにその使命をよりよく果たすことができるでしょうか。

洗礼においてキリスト者は、キリストとの新たな絆に入り、そしてキリストのうちに、キリストによって、すべての受洗者、全人類、被造界全体との新たな絆に入ります。唯一のおん父の息子、娘となり、同じ霊に油注がれ、キリストとの同じ絆を共有するおかげで、洗礼を受けた人は、一つのからだの一員として、互いに与えられ合いながら、等しい尊厳を享受しています（ガラテヤ 3・26–28 参照）。意見聴取のフェーズでは、こうした現実への気づきを再確認し、教会生活の中でこれまで以上に具体的に実現していかなければならないと指摘しました。それは、男女間の相互性、互恵性、相補性の関係性を通して行うことを含んでいます。とりわけ……、

a）大陸別総会は、視点は異なっていても、各大陸に存在する女性の経験、地位、役割に注意を払うことを一致して呼びかけ、世界中の多くの女性の信徒、奉献生活者の信仰、参加、あかしを祝福しました。そうした女性たちはしばしば宣教師や信仰の道の最初の教師として、遠隔地や困難な状況、そして「預言者的な周縁部」で奉仕職を実践しています。

b）大陸別総会はまた、教会内の関係性の失敗についてより深く考察することを求めています。そうした失敗はまた、教会内の女性の生活に影響を与える構造的な失敗でもあり、洗礼によって与えられたアイデンティティの中でより十全に成長することを模索する、継続的回心のプロセスへとわたしたちを招いています。シノドス総会の優先事項には、教会における男女の関係性、つまり叙階された奉仕者、男女奉献生活者、男女信徒の関係性をどのように生きるかについて、その喜びと緊張、そして回心と刷新の機会を取り上げることが含まれます。

c）シノドスの第 1 フェーズでは、女性の参加と承認、男女間の相互の支援関係、責任と統治の立場に女性がより多く位置するようにとの要望の問題が、教会の使命を生きるよりシノドス的な方法の探求において重要な要素として浮かび上がりました。第 1 フェーズに参加した女性たちは、社会と教会がすべての女性にとって成長、能動的な参加、健全な所属の場となるようにという明確な要望を表明しました。彼女たちは、教会が自分たちの側にいて、その実現に伴走し促進するよう求めています。シノドス的教会は、これらの問いにともに取り組み、女性の洗礼による尊厳をより明確に認め、教会と社会で女性が直面するあらゆる形態の差別と排除を拒否する答えを模索しなければなりません。

d）最後に、大陸別総会は、女性の経験、視点、観点の多様性を強調し、女性を均質な集団として、あるいは抽象的、イデオロギー的な議論の対象として扱うことを避けながら、この多様性をシノドス総会の作業において認識するよう求めています。

識別のための問い

交わりの精神のもと、宣教の視点をもって、統治、意思決定プロセス、決定事項の執行を含め、女性をさらに認知し、参加させられるようにするために、教会はそのプロセス、組織的取り決め、構造を刷新し、改革するために、どのような具体的措置を講ずることができるでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1）女性は、家庭、小教区、奉献生活、諸団体や運動体、信徒グループにおいて、また教師やカテキスタとして、信仰を伝える上で大きな役割を担っています。わたしたちはどのようにして、彼女たちのすでに大きな貢献をよりよく認知し、支援し、同伴することができるでしょうか。また、ますますシノドス的になる教会のために、どのようにその役割を向上していけるでしょうか。

2）女性のカリスマは、今日の教会にすでに存在し機能しています。わたしたちはそれらを識別、支援し、それらを通して霊がわたしたちに教えようとしていることを学ぶために何ができるでしょう。

3）すべての大陸別総会は、教会のあらゆるレベルにおける統治、意思決定、宣教、および奉仕職への女性の参加という課題に取り組み、この参加が単なる漠然とした願望にとどまらず、適切な組織の支援を受けられるよう求めています。

a）これらの分野で、より多くの女性を、新しい形で取り込むにはどうしたらよいか。

b）奉献生活において、どのようにすれば、女性は教会の統治と意思決定プロセスをよりふさわしく代表し、すべての教会的文脈において、より適切に虐待から守られ、該当する場合には、その仕事に対してより公正な報酬を得ることができるか。

c） 女性はどのように統治に貢献し、より大きな説明責任と透明性を促進し、教会への信頼感を高められるよう助けられるか。

d） 神学的考察や共同体の同伴に対する女性の貢献について、どのように考察を深めることができるか。教会のあらゆるレベルでの正式な識別プロセスにおいて、こうした貢献に対してどのように空間を与え、認知することができるか。

e）識別や意思決定機関に女性が効果的に参加するための手段や機会を提供するために、どういう新たな奉仕職を生み出すことができるか。司牧的ケアや福音化の主役が女性であることが多い遠隔地や厳しい社会状況の中で、どのようにして意思決定プロセスでの共同責任を信徒や女性奉献生活者、聖職者の間で増やすことができるか。第 1 フェーズで寄せられた意見では、共同責任や意思決定プロセスを共有するダイナミズムが存在しない場合、叙階された奉仕者と緊張が生じることが指摘されている。

4） 大部分の大陸別総会といくつかの司教協議会のまとめでは、女性の助祭職への参加という問題を検討するよう求めています。これを想定することは可能でしょうか、またどのような仕方になるでしょう。

5） 司牧の奉仕職と関連する責任の行使において、男女はどうすれば、よりよく協力できるでしょう。

B 2.4 宣教の観点から、洗礼による奉仕職との関連において、叙階された奉仕職を適切に評価するには、どうすればよいでしょうか。

各大陸別総会の最終文書は、シノドスが、叙階された奉仕職と洗礼による奉仕職との関係について考察することを強く希望し、共同体の通常の生活においてそれを行うことの難しさを強調しています。第二バチカン公会議の教えに照らして、シノドスの歩みは、洗礼による尊厳の行使（洗礼に根ざした召命、カリスマ、奉仕職の豊かさにおいて）と叙階された奉仕職との関係性に注目する貴重な機会を提供しています。叙階された奉仕職は、神の民に奉仕するたまもの、奪うことのできない働きとみなされています。具体的には……、

a）第二バチカン公会議の足跡の中に、共通祭司職と役務的祭司職との間の必要な関係性が再確認されます。それらは「相互に秩序づけられ」、なぜなら、双方が「それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の祭司職に参加している」（『教会憲章』10 項）からです。両者の間には、対立や競争、不平を言う理由はありません。その相補性が認識されるべきです。

b）大陸別総会は、司祭職のたまものに対する明確な感謝を表明し、同時に、シノドス的な視点でのその刷新を深く望んでいます。また、司祭の一部をシノドスの歩みに参加させることの難しさを指摘し、司祭が現代の課題に直面するのに苦労したり、人々の生活やニーズから離れたり、典礼と秘跡の領域のみに集中している例について広く懸念していることを指摘しています。また、多くの司祭が経験する孤独に懸念を示し、ケア、友情、サポートの必要性を強調しています。

c）第二バチカン公会議は、「神の制定による教会の役務は、種々の聖職位階において、古代から、司教、司祭、助祭と呼ばれる人々によって行使されている」（『教会憲章』28 項）と教えています。大陸別総会からは、叙階された奉仕職が、多様な働きの中で、すべての人のために、福音的な無償性の論理に従って、交わりと奉仕の生きたあかしとなるようにとの要望が出されています。また、司教、司祭、助祭がシノドス的なスタイルで導きと一致の奉仕職を果たすようにという要望も表明されています。これには、共同体内に存在するたまものとカリスマを認識し高めること、共同体が宣教を受け入れるためのプロセスを励まし同伴すること、福音の線に沿って聖霊に耳を傾けながら決断を模索することなど、具体的な願いが含まれています。また、神学校のプログラムを刷新し、よりシノドス的な方向性をもち、神の民全体とより接触するようにすることも要請されています。

d）洗礼後の生活に奉仕する、叙階された奉仕職について考えるとき、シノドスの第 1 フェーズは、聖職者主義が、健全で完全な奉仕する教会のエネルギーを孤立させ、分離させ、その結果、弱体化させ、散逸させる力である、と示しています。それを効果的に克服するためには、養成が特権的な方法です。聖職者主義は、叙階された奉仕者だけの特権として見るのではなく、神の民を構成するすべての人にさまざまな形で現れます。

e）多くの地域で、叙階された奉仕者、教会の職務を担う人々、教会の諸機関、そして教会全体に対する信頼が、「聖職者や教会の役職者による虐待のスキャンダル」の結果によって損なわれていると報告しています。その内容は、「何よりもまず、未成年者や弱者に対する虐待、そして他の種類の虐待（霊

的、性的、経済的、権威、良心）です。これは、被害者とサバイバー、その家族、そして地域社会に苦痛を与え続ける、開いたままの傷なのです」（『大陸ステージのための準備文書』20 項）。

識別のための問い

洗礼による奉仕職と叙階された奉仕職との関係が実りあるものとなるような、共同責任の文化とその具体的な形の双方を教会の中で促進するにはどうしたらよいでしょう。教会が完全に奉仕的であるならば、宣教の観点から、一つの神の民の中の叙階された奉仕者がもつ特別のたまものをどのように理解することができるでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1）「福音をのべ伝え、信徒を牧し、神の礼拝を挙行するために聖別される」（『教会憲章』28 項）司祭の奉仕職は、洗礼による奉仕職とどう関係しているでしょう。叙階された奉仕職の三職は、預言職、祭司職、王職をもつ民としての教会とどう関係しているでしょう。

2） 地方教会（教区）の司祭は、その司教とともに「一つの司祭団を構成」（『典礼憲章』28 項）します。司教と司祭の間のこの一致を強化し、司教のケアにゆだねられた神の民により効果的に奉仕するために、わたしたちはどう協力できるでしょう。

3）教会は、奉献生活の会や使徒的生活の会に所属する多くの司祭の働きによって豊かになっています。所属する会のカリスマによって特徴づけられる彼らの奉仕職は、どのようにすれば、よりシノドス的な教会を発展させることができるでしょうか。

4）宣教するシノドス的教会の中で、終身助祭の奉仕職はどのように理解されるべきでしょう。

5）教会のシノドス的性格を促進するために、神学校のカリキュラムや神学大学・学校などの教育課程を改革するために、どのようなガイドラインを採用できるでしょう。どのようにすれば司祭養成は、彼らが仕えるように招かれている神の民の生活や司牧の現実とより密接に関われるでしょうか。

6）叙階された奉仕職に矮小化されることなく、同時にそれを強化するような奉仕職の理解を育てるために、教会ではどのような養成の道筋を採用すべきでしょうか。

7）それが聖職者であれ信徒であれ、聖職者主義の考え方によって、教会における叙階された奉仕者の召命と、その他の神の民の召命両方を十分に表現することが、どのように妨げられるかを、併せて識別できるでしょうか。これを克服する方法をどう、一緒に見つけられるでしょうか。

8）とくに叙階された奉仕者の数が非常に少ないところで、信徒が共同体リーダーの役割を果たすことが可能でしょうか。このことは、叙階された奉仕職の理解に対し、どういう意味をもちうるでしょう。

9）いくつかの大陸が提案しているように、少なくともいくつかの地域では、既婚男性に司祭職を認めるという原理について、検討の場を開くことができるでしょうか。

10）宣教するシノドス的教会のビジョンにより根ざした、叙階された奉仕職への理解と候補者養成は、性虐待やその他の形態の虐待の再発防止の尽力にどう貢献できるでしょう。

B 2.5 宣教にかかわるシノドス的観点から、司教の奉仕職をどう刷新し、推進できるでしょう。

司教の奉仕職は聖書に根ざし、キリストのみ旨に忠実に聖伝の中で発展してきました。この聖伝に忠実に、第二バチカン公会議は司教職に関する豊かな教えを提示しました。「キリストの代理者であり全教会の目に見える頭であるペトロの後継者とともに生きた神の家を統治する使徒たちの後継者、すなわち司教」(『教会憲章』18 項)。「教会の位階的構成」に関する『教会憲章』の章は、司教職の秘跡性を確認します。これに基づいて、「団体性」(『教会憲章』22–23 項）と、三職（*tria munera*、『教会憲章』24–27 項）の行使としての司教職というテーマが展開されています。その後、司教がローマの司教とともに、教会全体のケアに参加することを可能にする組織として世界代表司教会議（シノドス）が設立されました。シノドス的な次元をより力強く生きるようにという招きは、司教職をあらためて深めることを求めており、それは司教職をシノドス的な枠組みの中により堅牢に位置づけるためです。具体的に言うと……、

a）司教団は、その頭であるローマ教皇とともに、そして、決して教皇抜きではなしに、「普遍教会の上に最高、完全な権能」(『教会憲章』22 項）をもつ主体です。この司教団は、各司教が自分に託された神の民の意見聴取を開始し、導き、まとめるとき、また、集まった司教がさまざまな集会（東方典礼カトリック教会のシノドスや評議会、司教協議会、大陸別総会、とりわけシノドス総会）で識別のカリスマを行使するときに、シノドスの歩みに参加します。

b） 使徒たちの後継者であり、「共同体に奉仕する役務を受け、神の代理として群れをつかさどる」(『教会憲章』20 項）ことを引き受けた司教たちに対して、大陸別総会はシノドス的回心を求めます。「主が自分の民の牧者たちに託した任務は真の奉仕」(『教会憲章』24 項）であることを、第二バチカン公会議によって思い起こさせられるのであれば、シノドスの歩みは、司教たちが、自らの共同体生活における霊の働きに対する根本的な信頼を生き、すべての人の参加が、共同体指導者としての彼らの奉仕職への脅威となることを恐れないよう求めます。むしろ司教たちが、すべての人（司祭と助祭、男女奉献生活者、男女信徒）が神の民としてともに歩むよう呼びかけ、教会のシノドス的なスタイルを促進し、教会における一致の原理となるよう促しています；

c） 神の民の意見聴取は、よりシノドス的な教会になるためには、すべての人がより広く識別に参加することをどれほど意味しているかを強調しており、そのためには意思決定プロセスの再考が必要です。その結果、より大きな透明性と説明責任を求める声に応える適切な統治機構が必要となり、それは司教の奉仕職の行使の仕方に影響を与えるでしょう。このことはまた、抵抗、恐怖、戸惑い感をもたらしてもいます。とりわけ、全信者のより多くの参加と、その結果としての司教の役割の「より排他的でない」行使を求める人がいる一方、政治的な民主主義のプロセスにゆだねる場合の、漂流するリスクを危惧し、疑念を表明する人もいます。

d） 教会におけるすべての権威は、キリストから生まれ、聖霊によって導かれるということについて、同様に強い気づきがあります。権威なしの多様なカリスマは無政府状態になりますが、それはちょうど、カリスマ、奉仕職、召命の豊かさのない厳格な権威が独裁政権になるのと同じです。教会は、シノドス的であると同時に、位階的です。だからこそ、司教の権威をシノドス的に行使することにより、一致を伴い、それを保護することになるのです。司教の奉仕職は、シノダリティの実践を通

して適切に再認識され、実現されます。それにより、霊が教会にもたらす多様なたまもの、カリスマ、奉仕職、召命に一致がもたらされるのです。

e）より十全なシノドス的教会の中で司教の奉仕職の刷新を進めるには、文化的、構造的な変化、多くの相互信頼、そして何よりも主の導きに対する信頼が必要です。したがって、大陸別総会は、霊におえる対話のダイナミズムが教会の日常生活に入り込み、会議、評議会、意思決定機関を活性化し、相互信頼感の構築と効果的な合意形成に役立つよう期待しています。

f）司教の奉仕職はまた、司教団へ帰属することや、結果的に、教会全体に対して共同責任を行使することをも含んでいます。この行使はまた、シノドス的教会の全体像の一部であり、「『健全な脱中央集権』の精神に沿って」、「教会という固有の『交わりの神秘（*mysterium communionis*）』の実りと表現である共同責任の精神をもってつねに行動しながら、『教師として』、そして司教としての『彼ら独自の働き』を遂行する中で、司教が熟知しており、教義、規律、交わりの教会の一致に影響しない問題を解決する権限を、司教たちの権能に残す」（『プレディカテ・エバンジェリウム』II、2 項。『福音の喜び』16 項、『神の啓示に関する教義憲章』7 項参照）という視点をもっています。

識別のための問い

司教の召命と使命を、シノドス的な宣教の観点からどう理解できるでしょう。共同責任を特徴とするシノドス的教会のために、司教の奉仕職のビジョンと行使には、どのような刷新が必要でしょう。

祈りと準備の内省のために

1）「（司教たち）は優れた、目に見える仕方で、教師、牧者、祭司であるキリスト自身の役目を担い」（『教会憲章』21 項）ます。この奉仕職は、「福音をのべ伝え、信者を牧し、神の礼拝を挙行するために聖別され」（『教会憲章』28 項）た長老の奉仕職とどのような関係にあるでしょう。叙階された奉仕者のこの三職は、預言者、祭司、王である民としての教会とどのような関係となるでしょうか。

2）司教の奉仕職の行使によって、意思決定過程における神の民の意見聴取、協力、参加はどのように求められているでしょう。

3）司教は、どのような基準に基づいて、シノドス的なスタイルによる職務遂行において自己評価し、評価されることが可能でしょうか。

4）司教が、諮問機関から提供された検討済みの助言とは異なる決定を下す義務があると感じるのは、どのような場合でしょう。そのような判断の根拠は何でしょうか。

5）「超自然的な信仰の感覚」（『教会憲章』12 項参照）と司教の教導職による奉仕との関係性の本質はどのようなものでしょう。シノドス的教会と司教の奉仕職との関係性をどう理解し、より明確にすることができるでしょうか。司教は神の民の他のメンバーとともに識別すべきですか、それとも別々にすべきですか。シノドス的教会には、両方の選択肢（ともに、か、別々に）の場があるでしょうか。

6）司教の生活と奉仕職の中で、三職（聖化、教え、統治）の配慮とバランスをどうとりうるでしょうか。司教の生活と奉仕職に関する現在のモデルは、司教が祈りの人、信仰の教師、賢明で効果的な管理者となり、三つの役割を創造的に、宣教するための緊張感の中で保つことを、どの程度可能にできるでしょうか。シノドス的な観点から候補者を特定するために、司教の略歴と識別プロセスをどのように修正できるでしょうか。

7）ローマの司教の役割と首位権の行使は、シノドス的教会においていかに展開されるべきでしょう。

B 3. 参加、統治、権威

宣教するシノドス的教会の中には、どのようなプロセス、組織、団体が必要でしょうか。

B 3.1 宣教するシノドス的教会において、権威による奉仕と責任の行使はどのように刷新できるでしょうか。

シノドス的教会は、洗礼によって教会の生活と宣教にすべての人が参加する権利と、ある人に託された権威による奉仕と責任の行使の両方を支持するよう求められています。シノドスの旅は、このことを実現するための、現代にふさわしい方法を識別する機会です。第 1 フェーズでは、この考察を助けるためのいくつかのアイデアを集めることができました。

a）権威、責任、統治の役割は、英語の「リーダーシップ」ということばで簡潔に表現されることもありますが、教会内ではさまざまな形をとっています。奉献生活、諸運動体や団体、教会関連機関（大学、財団、学校など）における権威は、叙階の秘跡に由来するものとは異なるもので、カリスマと結びついた霊的権威は、奉仕職と結びついた霊的権威と異なっています。これらの形態の違いは、教会における奉仕であるというすべて共通であるという事実を忘れることなく、守られなければなりません。

b）とりわけ、彼らは皆、自分自身について言われた師の模範に倣うようにという呼びかけを共有しています。「わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」（ルカ 22・27）。「昨日も、今日も、これからも、イエスの弟子たちにとって唯一の権威は奉仕の権威」[16]です。これらは、教会生活のあらゆる形態、あらゆるレベルにおいて、権威と責任の行使において成長するための基本的な座標軸です。これは、「キリスト自身の愛の宣教の鏡として教会を刷新することを目指す」（『プレディカテ・エバンジェリウム』I, 2）宣教のための回心の視点です。

c）この線において、第 1 フェーズの諸文書は、宣教するシノドス的教会における権威と責任の行使のいくつかの特徴を表現しています。つまり、権力や支配ではなく奉仕の姿勢であり、透明性、励まし、人間の繁栄であり、ビジョン、識別、包摂、協力、権限委譲のための能力です。そして何よりも、耳を傾ける能力と意欲が重視されます。このため、責任と権威のある立場にある人々には、これらのスキルと能力についてとくに特別な養成が必要だと主張され、また、より参加型の選出プロセスも主張されています。とくに司教の選出についてそう言われています。

d）透明で説明責任を果たすアプローチは、真に福音的な権威と責任の行使の基本となります。しかしながら、それはまた恐怖や抵抗を呼び起こすものです。だからこそ、識別する姿勢をもって、経営やリーダーシップに関する科学の最新知見を取り上げることが重要です。さらに、霊における対話は、意思決定と合意形成を円滑に行う方法として認識され、それは信頼を醸成し、シノドス的教会にふさわしい権威の行使を促進するものです。

---

[16] 「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説」。

e）大陸別総会はまた、権力と意思決定プロセスが、権威と責任のある立場にある一部の人々によって占有された体験を指摘し、こうした体験を、聖職者主義の文化やさまざまな形の虐待（性的、金銭的、霊的、権力による）と結びつけています。こうしたことが、とくに権威を尊重することが重要な価値観である文化圏において、教会の信頼性を損ない、その宣教の有効性を損なうのです。

識別のための問い

神の民全体の参加に役立つような権威と責任は、どのように理解され、行使されうるでしょうか。宣教するシノドス的教会として成長するためには、どういったビジョンの刷新と、権威、責任、統治の具体的な行使の形が必要でしょう。

祈りと準備の内省のために

1）教会の生活と宣教へすべての人が参加することに関する第二バチカン公会議の教えは、各地方教会、とりわけ司教や責任ある職務を担う人々の意識と実践に効果的に組み入れられているでしょうか。教会の宣教遂行において、何が、この教えのより深い認識と理解を発展させられるでしょう。

2）教会には、奉献生活の会や使徒的生活の会、諸団体や信徒運動体、教会運動体や新共同体などにおいて、交わりと宣教のために行使される、叙階の秘跡とは結びつかない権限と責任の役割が存在します。これらの権威の形態はいかに適切に奨励され、どのようにシノドス的教会における司教の権威との関係の中で行使できるでしょうか。

3）教会指導者が権威を行使するために養成する上で必要な要素は何でしょう。真の、洞察に満ちた、霊における対話の方法による養成は、どのように奨励できるでしょう。

4）神学校や養成の家は、シノドス的教会にふさわしい権威行使の方法を身につけた、叙階された奉仕職の候補者を養成するためにどのように改革されうるでしょう。『司祭召命のたまもの――司祭養成基本綱要』とその関連文書は、国レベルでどのように再考されるべきでしょう。神学校のカリキュラムはどのように再構築されるべきでしょうか。

5）キリスト教共同体には、どのような形態の聖職者主義が根強く残っているでしょうか。信徒と司教の間に距離があるという認識は根強いですが、それを克服するために何が役立つでしょう。どういった権威と責任を行使する形態が、適切に構築されたシノドス的教会にはふさわしくなく、取って代わられるべきでしょうか。

6）一部の地域で司祭が不足していることは、キリスト教共同体における叙階された奉仕職と、統治と責任の引き受けの関係を問う動機づけに、どの程度なっているでしょう。

7）権限と責任の行使について、他の諸教会や教会共同体から何を学ぶことができるでしょうか。

8）いつの時代も、教会における権威と責任の行使は、社会における一般的な経営モデルや権力のイメージに影響されます。わたしたちはどのようにしてこのことに気づき、教会と社会で流布している権威行使の実践について福音的な識別を行うことができるでしょうか。

B 3.2 どのようにすれば、霊の主役性を尊重しながら、真の意味でシノドス的な方法で、識別の実践と意思決定プロセスを発展させることができるでしょうか。

シノドス的な教会として、わたしたちは、教会の生活と宣教に参加するすべての人の権利を強調し、洗礼を受けたすべての人のかけがえのない貢献を引き出しながら、福音化の使命を果たすために取るべき措置をともに識別するよう求められています。すべての識別の根底には、祈り、みことばの黙想、秘跡生活への参与を通して、主のみ旨を行い、主との親密さを深めたいという願いがあり、それによってわたしたちは、主が選ぶように選ぶことができるのです。宣教するシノドス的教会における識別の位置づけについて……、

a）大陸別総会は、共有された意思決定プロセスを求める要望を表明しており、それにより、神の民全体、とりわけ関連する専門知識をもつ人々の貢献を総合することができ、また、さまざまな理由で女性、若者、マイノリティの人、貧しい人や排除された人など、社会生活の周縁部にとどまる人々を巻き込むことが可能になります。こうした願いは、意見も聞かれず決定が下されるような権威の行使の仕方への不満と併せて、よく表明されるものです。

b）大陸別総会はまた、その両方が教会の構成要素である、シノドス的次元と位階的次元の間の競合を見る人々の懸念についても言及しています。しかし、その逆の兆候も現れています。ある例では、シノドス的なプロセスの中で関係する権威者が決定を下す経験をしたことで、共同体がその正当性を受け入れ易くなりました。第 2 の例は、共同体内で健全な交流が欠如することで権威の役割が弱まり、ときには権威を単なる権力の主張に貶めるという認識の高まりです。第 3 の例では、司祭数が極めて少ない地域で、建設的かつ反抗的ではない仕方でそれを行使する信徒に、教会の責任が託されるようになっています。

c）意見聴取のフェーズで、霊における対話の方法が広く採用されたことで、対立を隠したり両極端に陥らない仕方で、多くの人が共同識別と参加型合意形成の要素を体験することができました。

d）統治と責任を担う人々は、神の民の声に耳を傾けることを含め、共同識別のプロセスを始め、促進し、同伴するよう求められています。とりわけ司教の権威は、これらのプロセスのシノドス的性格を促進して有効化し、さらにプロセス中に現れる結論の誠実さを確認する上で、基本となる役割を果たします。中でも、共同体の願いと「神のことばの一つの聖なる遺産を形成し、教会に託されたもの」（『神の啓示に関する教義憲章』10 項）との関係を検証することは司教の責任であり、その関係によって、そうした願いが神の民の「信仰の感覚」の真の表現と考えることが可能となるのです。

e）共同識別の視点を採用することは、あらゆるレベル、あらゆる組織形態の中で、教会に課題を与えることとなります。小教区や教区組織に加え、これは、諸団体、運動体、信徒主導のグループの意思決定過程にもかかわるもので、そこでは、投票などの慣行を日常的に伴う制度的な仕組みに頼っています。また、教会関連機関（学校、大学、財団、病院、難民受入・社会活動センターなど）の意思決定部門が、運営ガイドラインを認証し、策定する仕方にも疑義を呈します。最後に、奉献生活の会と使徒的生活の会に対して、そのカリスマの特質と自らの会憲を結びつける形で、課題を投げかけます（『大陸ステージのための準備文書』81 項参照）。

f）共同識別を安定的に活用できる意思決定プロセスを採用するには、個人的、共同体的、文化的、組織的な回心と、養成への投資が必要です。

識別のための問い

どのようにすれば、より参加型の意思決定プロセスをイメージできるでしょうか。それは、一致への奉仕として理解される権威に支えられた、聞き取りと共同識別のための空間を与えます。

祈りと準備の内省のために

1）意思決定プロセスにおいてわたしたちは、神のことばに耳を傾けるため、どのような空間を作るでしょう。ことばだけでなく、具体的に聖霊が主役となるための空間をどのように作りますか。

2）共同識別のダイナミズムを開く、聖霊における対話は、教会内の意思決定プロセスの刷新にどのように貢献できるでしょう。どうすれば、教会の正式な生活により中心的に取り入れられ、通常のやり方になりうるでしょうか。これを促進するには、教会法のどういった変更が必要でしょう。

3）どうすれば、共同識別のプロセスを支援する人の働きを促進し、それを実行する人々が十分な養成と同伴を受けられるようにできるでしょうか。共同識別のプロセスに同伴する叙階された奉仕者を、どう育成することができるでしょう。

4）女性、若者、マイノリティ、疎外された人々の声を、識別や意思決定のプロセスに参加させるためにはどうすればいいでしょう。

5）意思決定プロセス全体と意思決定する具体的な場面との関係をより明確に説明することは、各段階におけるさまざまな行為者の責任をより明確にするため、どのように役立つでしょう。意思決定と識別が共有する関係性を理解するにはどうすればいいでしょう。

6）男女奉献生活者は、地方教会の意思決定プロセスにどのように参加でき、また参加しなければならないでしょう。識別と意思決定プロセスに関して、彼らの経験と彼らの異なる霊性から何を学ぶことができるでしょう。諸団体、運動体、信徒主導のグループから何を学ぶことができるでしょう。

7）権威をもつ人が、共同識別プロセスで得られた結論を承認できないと感じ、異なる方向性の決定を下す場合、わたしたちはどのように建設的に対処できるでしょう。その権威者は、プロセスに参加した人々にどのような「補償」を行うべきでしょうか。

8）さまざまな社会や文化が参加型プロセスを運営する方法から、わたしたちは何を学ぶことができるでしょう。対照的に、教会で採り入れられているどの文化モデルが、よりシノドス的な教会を築く上で障害となっていることを示しているでしょうか。

9）他の諸教会や教会共同体の経験、また他の諸宗教の経験から、わたしたちは何を学び、何を受け取ることができるでしょう。わたしたちの意思決定プロセスを再考するために、先住民族、マイノリティ、抑圧された人々の文化からどのような刺激を受けられるでしょう。デジタル環境での経験から、どのような洞察を得ることができるでしょう。

B 3.3 宣教するシノドス的教会を強化するために、どのような組織を展開できるでしょう。

大陸別総会は、教区・小教区司牧評議会、経済問題評議会、教区シノドス・全国シノドスといった既存組織の刷新、あるいは新しい組織の創設によって、今回の旅で体験したシノドスの進め方が、あらゆるレベルの教会の日常生活に浸透することを強く希望していることを表明しています。神の民の中の新たにされた関係性の重要さを軽視するつもりはないものの、長期的な変化を強化するためには、組織に関する働きは不可欠です。とりわけ……、

a）洗礼から生まれる宣教における共同責任が、単なる書類上だけの実施となったり、各個人の善意に完全に依存しないために、具体的な組織形態をとらなければなりません。したがって、共同識別が定期的に実践される空間とともに、適切な制度的枠組みが必要です。これを、権力の再分配の要求だと捉えるべきではなく、洗礼に由来する共同責任を効果的に行使する必要性と捉えるべきです。この後者の必要性は各人に権利と義務を与え、その人のカリスマと奉仕職に応じて、その権利と義務を行使できるようにすべきなのです。

b）そのためには、透明性が高く、宣教に焦点を当て、参加に開かれた適切なプロセス、また、女性、若者、マイノリティ、貧しく疎外された人のための場所を作るのに適切なプロセスで、組織や諸団体が機能することが必要です。これは、すでに述べた参加型の組織についても言えることで、それぞれの役割は再び認証され強化されなければなりません。またこれは以下にも当てはまります。つまり、諸団体、運動体、新たな共同体の意思決定機関、奉献生活の会と使徒的生活の会の統治機関（それぞれ独自のカリスマにふさわしい方法による）、学校、病院、大学、マスメディア、難民受入・社会活動センター、文化センター、財団など、それを通じて宣教活動やキリスト教共同体の奉仕が実現する、しばしば市民法にも従うべき、多くの多様な施設にも当てはまります。

c）虐待（性的、経済的、霊的、心理的、組織的、良心的、権力的、法的）の危機がもっとも顕著な状況において、透明性の観点から組織、団体、機能している仕組みを改革するよう求める声がとくに強くなっています。虐待事件の不適切な処理は、多くの場合、問題の一部であり、教会組織や団体の仕組み、プロセス、全体的な機能に疑問が投げかけられ、さらにその中で働く人々の考え方も問われています。透明性と共同責任の追求は、恐怖と抵抗をも引き起こします。だからこそ、対話を深め、あらゆるレベルで分かち合いと対話の機会を設けることが必要です。

d）霊における対話の方法は、さまざまな理由で神の民の種々のメンバーの間に不信の空気が生じた状況で、信頼を回復するためにとくに価値があることが証明されています。霊の声に耳を傾ける回心と改革の旅には、この旅に同伴し支援することのできる組織と団体が必要です。しかし同時に、大陸別総会は、組織だけでは十分ではなく、考え方の転換が必要であり、それゆえ養成に投資する必要があるという確信を強く表明しました。

e）さらに、教会法の分野でも、次のような行動をとることが望ましいと思われます。つまり、現行法の中で強く肯定されている権威の原則と参加の原則との間の関係のバランスを再調整すること、すでにある諸団体のシノドス的指向を強化すること、共同体生活の必要性から必要と思われる場合には新団体を創設すること、現行法の効果的な適用を監視すること、です。

識別のための問い

シノドス的教会は、共同責任と透明性を生きる必要があります。こうした認識を、団体、組織、プロセスの改革の基盤とし、時間の経過とともに変化を強化するにはどうすればよいでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1）共同責任と透明性を促進するために、教会法上の組織や司牧のプロセスはどのように変化すべきでしょう。今ある組織は参加を保証するのに十分ですか、新しい組織が必要でしょうか。

2）組織と団体の刷新に教会法はどのように貢献できるでしょう。どういった変化が必要、適切と思われるでしょうか。

3）現在教会法に規定されている参加型組織を、効果的に共同識別できる組織へと変容させる過程には、どのような障害（精神的、神学的、実践的、組織的、財政的、文化的）が存在しているでしょうか。それらが効果的、創造的で、活気に満ちて宣教を支援できるように、どういった改革が必要ですか。女性、若者、貧しい人、移住者、マイノリティの人、さまざまな理由で社会生活の周縁にいる人々の存在と貢献に対して、どうすれば彼らは、より開かれた状態でいられるでしょうか。

4）シノドス的教会の視点は、奉献生活の組織とプロセス、信徒団体のさまざまな形態、教会関連機関の機能に対し、どう課題を投じていけるでしょうか。

5）組織としての生活のどういった分野において、透明性（経済・財務報告、責任ある地位の候補者の選出、任命など）を高める必要があるでしょうか。これを実現するために、どのようなツールを使うことができるでしょう。

6）共同での意見聴取や識別のプロセスに対する透明性と開放性の見通しもまた、恐れを抱かせます。それはどのように現れるのでしょう。懸念を表明する人たちは何を恐れているのでしょう。これらの恐怖にどのように対処し、それを克服できるでしょうか。

7）ある団体のメンバーと団体そのものを、どの程度区別することができるでしょう。虐待のケースを処理し損なった責任は、個人のものでしょうか、組織的でしょうか。あらゆる種類の虐待を防止する文化の創造に、シノドス的視点はどのように貢献できるでしょうか。

8）公的機関や公法・市民法が、社会における透明性と説明責任の必要性に応えるよう努力している方法（三権分立、独立監督機関、特定のプロセスの公開義務、任用期間の制限など）から、何を学ぶことができるでしょう。

9）シノドス様式をとる組織や団体の機能に関して、他の諸教会や教会共同体の経験から何を学ぶことができるでしょうか。

B 3.4 地方教会のグループ化を伴うシノダリティや団体性の事例に、どういった組織を与えられるでしょうか。

シノドスの歩みの第 1 フェーズは、さまざまな地方教会をまとめるシノドス的で、団体性をもつ機関が果たす役割を強調しました。つまり、「東方典礼教会の位階的組織（*Eastern Hierarchical Structures*）」、そしてラテン典礼教会では司教協議会です（『プレディカテ・エバンジェリウム』I,7 参照）。さまざまな段階で作成された文書は、地方教会における神の民の意見聴取とその後の識別の段階が、いかに互いに耳を傾けることを通して霊に耳を傾ける真の体験であったかを強調しています。この豊かな体験から、わたしたちはますますシノドス的となる教会を築くのに役立つ洞察をえることができるのです。

a）シノドスの歩みは、神の民、司教団、ローマの司教など、すべての主体がそれぞれの機能に応じて真に関与するため、「教会のすべての決定にインスピレーションを与える、動的な交わり」[17]になりえます。このシノドスの段階が整然と展開されたことで、神の民の意見聴取が司教の奉仕職を弱めることにつながるのではないかという懸念は払拭されました。それどころか、この意見聴取は、各司教が自分の教会の「一致の目に見える根源であり、基礎」（『教会憲章』23）として始めたため、可能となったのです。その後、「東方典礼教会の位階的組織」と各国司教協議会において司教たちは、地方教会から寄せられる意見を吟味しながら、団体性による識別を行いました。こうして、シノドスの歩みは完全に、シノドス的な教会において、司教の団体性を実際に実行するよう促したのです。

b）霊的、典礼的、規律上の伝統、地理的近接性、文化的近接性を共有する地方教会のグループがかかわる事例において、シノダリティと団体性を行使する課題は、司教協議会に始まり、神学的、教会法的考察を新たに求めています。たとえこうした組織でも、「司教たちの交わり（*communio Episcoporum*）は、信者たちの交わり（*communio fidelium*）に根ざした、教会の交わり（*communio Ecclesiae*）への奉仕という表現を見出しました」（『プレディカテ・エバンジェリウム』I,7）。

c）この課題に直面する理由の一つは、『福音の喜び』に現れています。「それぞれの地域で問われるすべての問題についての識別を、地域司教に代わって教皇が行うことは適切ではありません。この意味でわたしは、健全な『脱中央集権』を進める必要を感じています」（16 項）。シノドス設立 50 周年に際して教皇は、シノダリティは地方教会や普遍教会のレベルだけでなく、管区や教会地域、部分教会会議、とくに司教協議会といった教会のグループ化レベルでも実施されると明記しました。「わたしたちはこれらの組織を通して、『団体性』の中間形態をさらに実現化していくことを考えなければなりません。そのために、古代の教会の組織の一部を現代化し、統合することも考えられます」[18]。

識別のための問い

これまでのシノドスの体験に照らして、シノダリティが宣教の観点から「真正な教理についての権威をも含んだ具体的権限の主体」（『福音の喜び』32 項）として考えられるためには、東方典礼カトリ

[17] 「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説」。
[18] 同上。

ック教会の司教会議（*Synods of Bishops*）や位階評議会（*Councils of Hierarchs*）、司教協議会や大陸別総会といった地方教会のグループを含む機関において、それらを通して、どういったより良い表現を見出せるでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1）互いに耳を傾けることを通して霊に耳を傾けるというシノドスのダイナミズムは、十全にシノドス的な教会において司教たちの団体性を行動に移すための、もっとも実践的で説得力ある方法です。シノドスの歩みの体験の上に築かれます。

a）どのようにすれば、教会におけるあらゆるレベルの意思決定プロセスを行う際に、神の民に耳を傾けることを通常の、習慣的な仕方にすることができるか。

b）地方教会において、どのように、神の民の声に耳を傾けることが実践できるか。とくに、聞き取りと教会的識別の効果的な場とするために、参加型組織をどのように強化できるか。

c）東方典礼カトリック教会の司教団や司教協議会のレベルでの意思決定プロセスを、地方教会における神の民の声に耳を傾けることを基礎にして、どのように再考することができるか。

d）大陸レベルでの取り組みは、どのように教会法に統合できるか。

2）地方教会での意見聴取は、神の民に耳を傾ける効果的な方法であるため、司教の識別は、神の民の信仰の感覚を通して霊が教会に語ったことを権威をもって確認できる団体性行為の性格があります。

a）司教協議会の識別には、どの程度の教義的権威があると言えるか。東方典礼カトリック教会は、その司教団をどのように規制しているか。

b）大陸別総会の識別には、どの程度の教義的権威があると言えるか。また、大陸やその他の国際的規模で、複数の司教協議会が集まる組織の識別は、どうか。

c）教会のグループ化を伴うこれらのプロセスに関して、ローマの司教はどのような役割を果たすか。どのような方法でそれを実行できるか。

3）「東方典礼教会の位階的組織」、司教協議会、大陸別総会を、シノダリティと団体性の効果的な事例とするために、古代の教会秩序のどういった要素を統合し、刷新する必要があるでしょう。

4）第二バチカン公会議は、全教会とそのすべての部分が、それぞれのたまものを相互に分かち合うことによって益をえると述べています（『教会憲章』13 参照）。

a）総会、部分教会会議、教区シノドスの審議は、他の諸教会にどのような価値をもつか。

b）東方典礼カトリック教会の豊かなシノドス経験から、ラテン典礼教会はどのような洞察をえることができるか。

c）地方教会のいくつかのグループ（部分教会会議、司教協議会など）が同じ問題に収斂することで、ローマの司教が普遍教会のレベルでその問題に取り組むことをどの程度約束できるか。

d）地方の諸団体が異なるアプローチを採りうるとき、ローマの司教に託された一致の奉仕はどのように行使されるべきか。異なる地域間の多様なアプローチのために、どういう余地があるか。

5）団体性とシノダリティを実施するための地方教会のグループ化について、他の諸教会や教会共同体の経験から何を学ぶことができるでしょうか。

B 3.5 どのようにすれば、シノドスの制度を強化し、それを、全シノドス的教会の中の司教の団体性の表現とできるでしょうか。

聖パウロ六世教皇は、1965 年 9 月 15 日の自発教令『アポストリカ・ソリチトゥード』によって、シノドスを「普遍教会のための司教による常設評議会」として設立しました。こうしてパウロ六世は、全教会のケアに司教たちが参加できるようにという公会議の要請を受け入れ、「このシノドスは、……すべての人間の制度と同様、時の経過とともに改善することができる」と明記しました。教皇フランシスコは、使徒憲章『エピスコパリス・コムニオ』（2018 年 9 月 15 日）により、シノドスを司教の集いとして構成された行事から、段階的に、展開される意見聴取のプロセス（4 項参照）に変え、教会全体と教会のすべての人々（神の民、司教団、ローマの司教）がより十全な形で参加できるよう、この待ち望まれた「完璧化」に貢献しました。

a）「2021–2024 年シノドス」は、各主体がその能力を最大限に発揮し、他との相乗効果で特有の機能を果たす、教会の譲れない要素として、首位権、団体性、シノダリティを統合的に行使するのに最適な文脈であることを明確に示しています。

b）ローマの司教は、普遍教会のために総会を呼びかけて教会をシノドスに招集し、また関連するシノドスのプロセスを開始し、同行し、終結する責任を負っています。この特権は、「司教たちの一致と信者の群れの一致との……目に見える根源であり、基礎」（『教会憲章』23 項）として、ローマの司教に属しています。

c）「個々の司教は、各自の部分教会における一致の目に見える根源であり、基礎である。それらの部分教会……のうちに、またそれらから、唯一単一のカトリック教会が存在する」（『教会憲章』23 項）ので、自分の教会における神の民の意見聴取を始め、同伴し、結論づけることは、各教区の司教の責任です。普遍教会に対する司教の配慮（『教会憲章』23 参照）に照らして、司教はまた、シノダリティと団体性の行使を規定する超教区の諸組織に協力する責任を負っています。このようにして司教は、司教の奉仕職にふさわしい教会の識別の機能を果たすのです。

d）これらの組織は司教団全体をまとめてはいませんが、司教がこれらを通じて行う識別は、その行為の目的そのものにより、団体性の性格を帯びています。実際、シノドスの歩みにおける司教の集いは、神の民の信仰の感覚が表されている、地方教会で行われた意見聴取の結果を精査する任務を担っています。「信仰において誤ることができない」（『教会憲章』12 項）神の民の意見聴取を通して、霊が教会に語っていることを、団体性ではない行為がどうして識別することができるでしょうか。

e）これまでのシノドスの体験は、団体性の効果的な行使がシノドス的教会において発展しうることを実証しました。識別は主に「教会を治める人々に属している」（『教会憲章』12 項）行為ですが、大陸別総会に参加した神の民の意見のおかげで、検討課題との関連で、深さとかかわりが生じました。

識別のための問い

教会のシノダリティ、司教の団体性、教皇首位権の間の動的で互恵的な関係に照らして、シノドスの制度は、神の民、司教団、ローマの司教の特有の権能を尊重しながら、すべての人の完全な参加を

保証するシノダリティの行使のための、安全で保証された空間となるよう、どのように完成されるべきでしょう。シノドス第 16 回通常総会の第 1 会期（2023 年 10 月）において、司教以外のグループにも参加を認めるという試みを、どのように評価すべきでしょうか。

祈りと準備の内省のために

1）シノドスの歩みは教会に、「教会のすべての決定にインスピレーションを与える、動的な交わり」[19]を採り入れます。

a）このダイナミズムを、教会生活の全レベルで、標準的な進め方にするにはどうすればよいか。

b）権威の原理は、シノドスの歩みにどのように適合するか。

c）シノドスの歩みは、ローマの司教を含む、さまざまなレベルの教会権威の理解にどのような影響を与えるか。

2）シノドスの歩みの第 1 フェーズは、地方教会における神の民の意見聴取と、それに続く「東方典礼教会の位階的組織」と司教協議会、そして大陸別総会における識別の働きによって、「部分」から「普遍」へという動きを成就します。

a）意見聴取が、所与の教会で生きる神の民の信仰の感覚の現れを、真に捉えるようにするには、どのようにすればよいか。

b）「東方典礼教会の位階的組織」、司教協議会、大陸別総会は、「神の民の『信仰の感覚』と司牧者の教導職との間の実りある結びつき」（『準備文書』14 項）をどう強めることができるか。

c）司教協議会の集いや大陸別総会において、能力のある神の民のメンバーの存在がどれほど望まれるか。

d）最近創設されたアマゾン地域教会協議会のように、司教のみで構成される常設の教会組織はどのような役割を果たすことができるか。

3）ローマに招集されるシノドス総会では、シノドスの道の第 2 フェーズとして、霊が神の民に語ったことに耳を傾ける教会の普遍性を表現します。

a）この司教の総会は、シノドスの歩みの中でどのように位置づけられるのか。

b）シノドスの歩みの第 1 フェーズとの連続性をどのように実現するか。シノドスの歩みの第 1 フェーズを証言する有能な証人が存在することは、これを保証するのに十分か。

c）司教協議会の総会や大陸別総会が識別の働きを実施する場合、この更なる識別の働きはどのように特徴付けられ、どのような価値をもつのか。

4）第 3 フェーズは、シノドス総会の成果を地方教会に還元して実施する動きです。唯一の教会の普遍的次元と地方的次元の間の「相互内面化」を十全に実現するために、わたしたちはどのように支援できるでしょうか。

[19] 「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説」。